

朝酌川河川改修工事に伴う

西川津遺跡発掘調査報告書

— II —

昭和 57 年 3 月

文 育 委 員 会

例　　言

1. 本書は昭和56年度、島根県教育委員会が県土木部の委託を受けて実施した、朝鶴川河川改修工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2. 調査地は、島根県松江市西川津町字宮尾坪内 588番地他で、次のような調査組織で調査を行った。

- 調査主体

島根県教育委員会

- 事務局

武田友秀（文化課長）、藤間亨（文化課主査）、長谷川行雄（文化課長補佐）、岩崎况一郎（文化振興係長）

- 調査担当

石井悠（埋蔵文化財第一係長）、村尾秀信（文化課主事）

- 調査指導

文化庁記念物課

山本　清（島根県文化財保護審議会委員、島根大学名誉教授）

町田　章（島根県文化財保護審議会委員、奈良国立文化財研究所集落遺跡研究室長）

田中義昭（島根大学法文学部助教授）

河瀬正利（広島大学文学部助手）

下條信行（平安博物館助教授）

東森市良（島根県埋蔵文化財調査員）

宍道正年（島根県埋蔵文化財調査員）

根木　修（岡山市教育委員会）

大西郁夫（島根大学理学部助教授）

古野　毅（島根大学農学部助教授）

3. 本書の作成は、石井悠、村尾秀信が協議して編集・執筆にあたった。なお、島根大学理学部大西郁夫助教授から玉稿を賜わった。

4. 本遺跡の現地調査から報告書作成に至るまで、上記以外の多数の方々から協力を賜った。記して謝意を表する次第である。

本文目次

I 調査に至る経緯	1
II 調査の概要	1
III 位置と歴史的環境	2
IV 遺跡の概要	4
V 出土遺物の考古学的観察	9
1. 繩文土器	9
2. 弥生土器	11
3. 石器	21
4. 木製品	23
5. 漆器・その他の遺物	35
VI まとめ	36
VII 松江市・西川津遺跡の花粉分析	38
VIII 西川津遺跡出土木製品の樹種識別	44

挿図目次

第1図 川津・持田平野の条里制跡	3	第13図 弥生土器実測図(4)	18
第2図 周辺の遺跡	4	第14図 弥生土器実測図(5)	19
第3図 遺跡周辺の地形図	5	第15図 石器実測図	22
第4図 調査区縦断堆積土層模式図	7	第16図 木製品実測図(1)	24
第5図 調査横断面図	7	第17図 木製品実測図(2)	26
第6図 第IIグリッド遺構配置図	8	第18図 木製品実測図(3)	28
第7図 堆積土層断面図	9	第19図 木製品実測図(4)	30
第8図 繩文土器拓影	11	第20図 木器未製品実測図(1)	32
第9図 弥生土器実測図(1)	13	第21図 木器未製品実測図(2)	33
第10図 弥生土器実測図(2)	15	第22図 西川津遺跡とタテチヨウ遺跡	41
第11図 弥生土器拓影	16	第23図 花粉ダイヤグラム	41
第12図 弥生土器実測図(3)	17		

図 版 目 次

遺 踪 遺 望	PL. 1
発掘前の状況	PL. 1
発掘調査風景	PL. 2
発掘調査風景	PL. 2
発掘調査区全景	PL. 3
第IIグリッド遺構検出状況	PL. 3
第IIグリッド杭及び遺物出土状況	PL. 4
第IIIグリッド立木横転状況	PL. 4
第IVグリッド立木横転状況	PL. 4
鍼出土状況（第IIグリッド）	PL. 5
鍵状木製品出土状況（ タ ）	PL. 5
又鍼出土状況（ タ ）	PL. 5
弥生土器出土状況（ タ ）	PL. 5
又鍼出土状況（第IIIグリッド）	PL. 6
柄状木製品出土状況（ タ ）	PL. 6
狭鍼出土状況（ タ ）	PL. 6
丸鍼出土状況（ タ ）	PL. 6
丸鍼未製品出土状況（ タ ）	PL. 7
木製品出土状況（ タ ）	PL. 7
柄の接着された石斧出土状況（第IVグリッド）	PL. 8
狭鍼出土状況（ タ ）	PL. 8
柄状木製品出土状況（ タ ）	PL. 8
石斧接着用柄出土状況（ タ ）	PL. 8
繩 文 土 器	PL. 9
弥 生 土 器	PL. 10
石 器	PL. 11
木 製 品（鍼）	PL. 12
木 製 品（鍼）	PL. 13
木 製 品	PL. 14
木 器 未 製 品	PL. 15
漆器（樹）・木器末製品	PL. 16

I 調査に至る経緯

本遺跡の発見は古く、松江市西川津町を通る県道松江・境線沿いに設けられた電柱工事中に弥生式土器等の遺物が出土したことに始まる。

昭和54年3月これまで西川津遺跡と称されていた地点から南へ約500m離れた学園橋付近でも弥生式土器片、土師器片が発見され、遺跡の範囲拡大が考えられたので、西川津遺跡として取扱うこととなった。発見は、下流部分から開始された朝鈴川河川改修工事現場であり、付近の遺跡分布調査中の島根大学学生によってである。

遺跡発見の知らせを受けた松江市教育委員会は、現地踏査を行い、島根県松江土木建築事務所と協議した結果、新発見の地点については、工事も最終段階であり発掘調査等を行うこともできないが、今後工事が予定される上流部分、即ち当初から遺跡とされていた地点に向う工事にあたっては、事前の発掘調査を実施するということで合意に達した。

その後、調査について数度の協議を河川課と行い、河川改修工事を急ぐ部分の発掘調査（第1次調査）を昭和54年度に実施した。第1次調査の結果に基づいて、昭和55年度に第2次調査を実施したが、予想以上の出土遺物が検出され、当初予定の調査を期間内に終了することが困難となつたため、残り3分の2の部分を第3次調査として本年度に持ち越すことになった。総額8,300,000円の経費で当教育委員会が調査を実施した。

II 調査の概要

第3次調査は、第2次調査の残り部分、即ち第Ⅲグリッド～第Ⅳグリッドの調査を行った。調査区全体に一辺5mの方眼を組み、北東の交点を基準に中グリッド（例 AL 106）を設定し、さらに中グリッド内を一辺2.5mの小グリッドに分割して北西区から右まわりに1～4とした。

現地調査は、昭和56年6月5日から開始したが、表土は地表下約80cmまでを前年度に重機掘削を行っていたため本年度は人力による発掘のみであった。

現在の朝鈴川が大きく蛇行する内側に調査区が存在し、川岸に近いため、本年度も冠水に悩まされた。また6月末の断続的に降った大雨のため調査区は冠水し、付近一帯は洪水となり、諸器材が水没あるいは流失し、作業を続行するにはあまりにも危険な状態に追いつまれたこともあった。

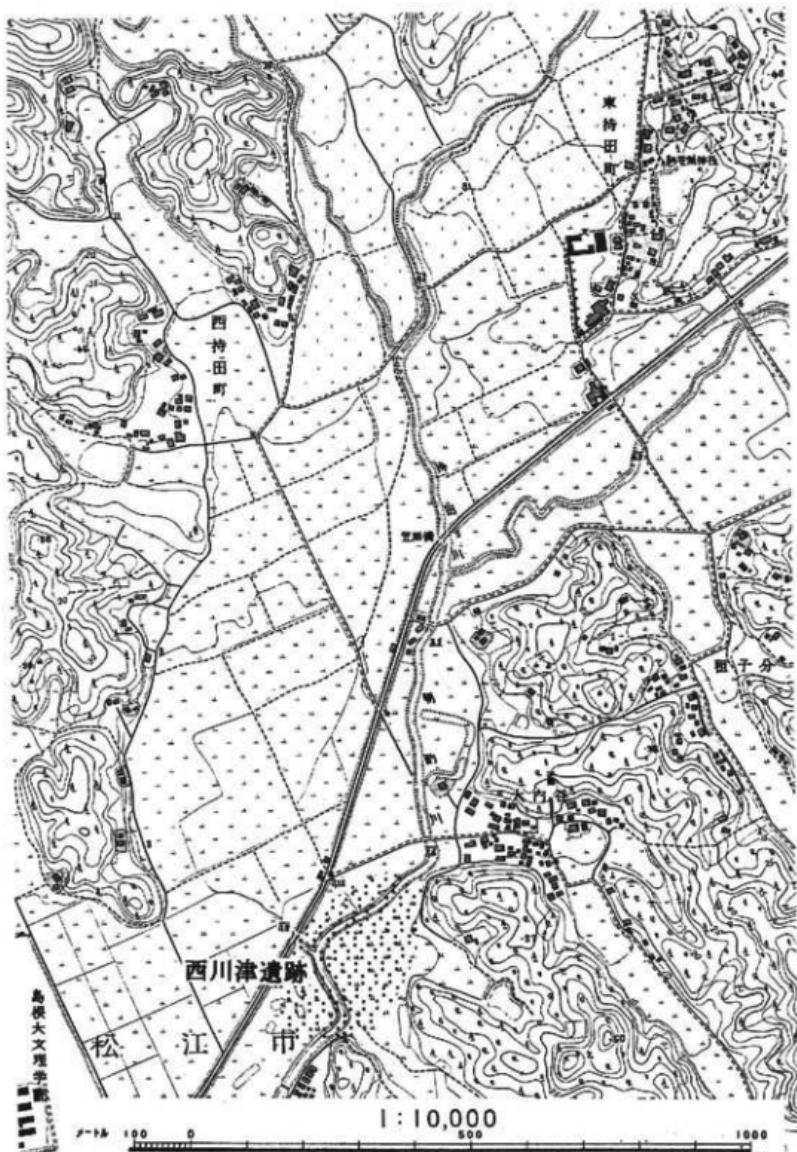
Ⅲ 位置と歴史的環境

本遺跡の所在する地籍は、松江市西川津町字宮尾坪内 558番地他で、大内谷地区の南西部に広がる沖積地の低平な水田中にある。このあたりは松江市街地の北東部を占める川津地区の一角にあたり、巣山、和久羅山の山塊が西にせり出し、やがて朝駒川へと下ってゆく大内谷丘陵と橋本丘陵にはさまれたところに位置する。ここを朝駒川が大きく蛇行しながら南流し、やがて大橋川へ流れ込むが、本遺跡はその河川敷を中心に、東西約200m、南北約800mの広がりを持つものと推定されており、遺物を多量に包含している砂礫層は地表下200~300cmで、海拔-0.5~-1.5mを測る。

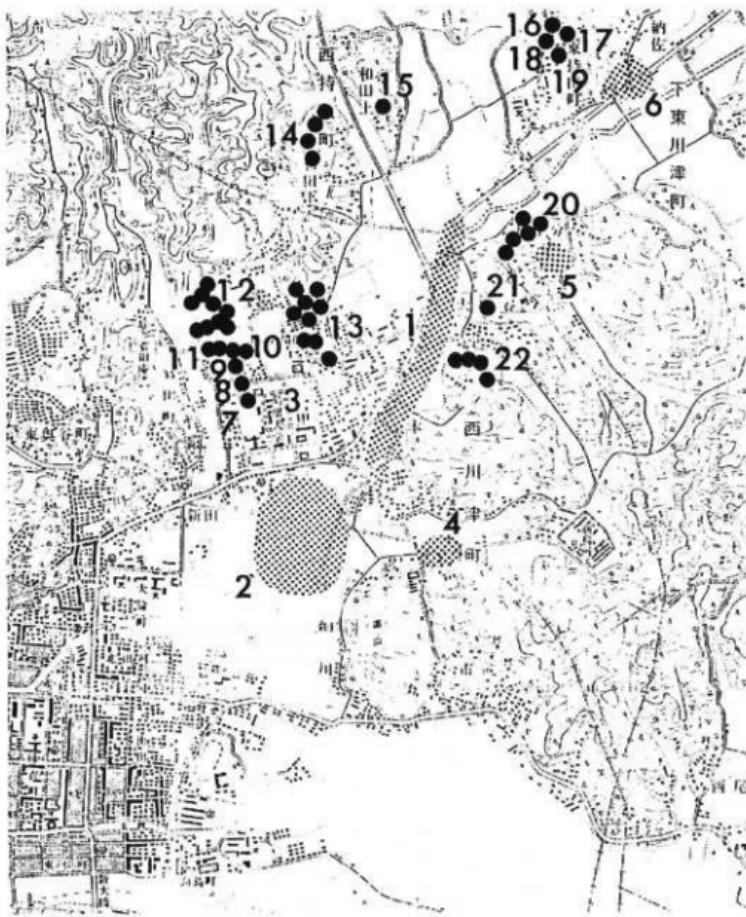
さて、本遺跡の周辺には、縄文時代の遺跡として、金崎遺跡などが平野周辺に点々と知られているが、発掘調査によってその内容が知られているものは今のところない。弥生時代になると、島根大学構内遺跡、貝崎遺跡、橋本遺跡などが知られており、特に、本遺跡より 1.5km 程下流に存在するタテチョウ遺跡は昭和52年の発掘調査によって、弥生土器を中心とした各種多量な土器、木製品、特殊遺物などを検出したことにより、よく知られているところである。一般に弥生時代の遺跡は、本遺跡、タテチョウ遺跡と同様に、多くは平野・淵辺の水田面下に深く埋もれているものと思われ、現在周知されているものの数倍にも達すると見られる。そして、次の古墳時代になると、比較的古式様相を持つ下東川津町の道仙古墳群、中期後半の金崎古墳群、背田ヶ丘古墳、薬師山古墳などがあり、このうち発掘調査のなされた金崎1号墳は、全長35mの前方後方墳でやや細長い竪穴式石室を内蔵し、副葬品として古式様相をそなえた各種須恵器などとともに、滑石製異形子持勾玉・同管玉・同棗玉・めのう勾玉・ガラス玉・滑石製小玉・彷彿內行花文鏡・金環・直刀などの豊富な遺物が検出されている。これらは、5世紀後半から6世紀前半という比較的短期間に集中的に營まれた方系墳のみによる古墳群として、この種の古墳群の成立過程を解明する上で注目されるとともに、この地に有力な地域勢力の存在があったことをうかがわせる。また、その金崎古墳群と対峙する南御丘陵には馬込山古墳群、貝崎古墳群など多数の方系墳が知られている。後期に入ると、出雲地方の特徴の一つとされる石棺式石室を内蔵する古墳も数多く分布しており、その著例として、東持田町の佐々木充宅畠中古墳、同野津真宅前古墳、同加佐奈子神社古墳、同加美古墳、上東川津町西宗寺古墳、同葉佐馬古墳などがある。

西川津遺跡は、大略以上のような歴史的環境を持つ川津・持田平野の一角に営まれる。

なお、国土地理院発行の1万分の1地形図から川津・持田平野には条里制の跡が近年まで残っていたと推定できる。（第1図参照）

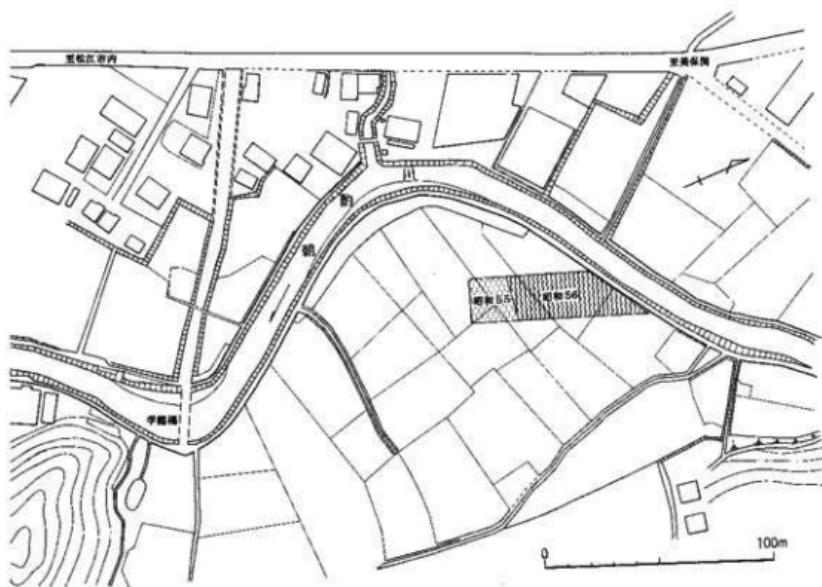


第1図 川津・持田平野の条里制跡



第2図 周辺の遺跡 (1 : 25000)

- | | | | |
|------------|------------|-------------|--------------|
| 1. 西川津遺跡 | 2. タテチョウ遺跡 | 3. 烏根大学構内遺跡 | 4. 櫛木遺跡 |
| 5. 貝崎遺跡 | 6. 納佐遺跡 | 7. 薬師山古墳 | 8. 菅弓ヶ丘古墳 |
| 9. 小丸山古墳 | 10. 宮田古墳群 | 11. 萩弓古墳 | 12. 上浜弓古墳群 |
| 13. 金崎古墳群 | 14. 宮垣古墳群 | 15. 太源古墳 | 16. 佐々木浅市宅古墳 |
| 17. 野津真宅古墳 | 18. 加美古墳 | 19. 加奈子古墳 | 20. 貝崎古墳群 |
| 21. 古屋敷古墳 | 22. 馬込山古墳群 | | |



第3図 遺跡周辺の地形図

IV 遺跡の概要

本遺跡は現在の朝酌川に沿って、上流部は海崎地区、下流部は橋本地區あたりまで至ると考えられる。しかし、その明確な範囲は現在のところ確定できず、かなりの範囲で低湿地遺跡（部分的には、遺跡の存在しない所や、比較的微高地で地盤が安定し居住地となった所も含むと考えられる）が広がると想定できる。

こうした大遺跡の一画を調査した結果はおおよそ次のとおりである。

堆積土層

第2次調査の結果、第Iグリッドでは地表下1.8m=海拔0m前後から遺物の最も多く出土した青色砂層、青白色砂礫層が検出され、以下黒色粘土層の無遺物層へと続いていたが、調査区の北側へ至る（第Iグリッド→第IIグリッド）に従って青色砂層・青白色砂礫層が深い位置で検出されている。また東西方向の土層をみると、青色砂層、青白色砂礫層より上の層は東側から流れ込んだ形で傾斜して堆積し、無遺物層である黒色粘土層も東側が若干高い位置で検出された。調査区の東側に存在する水田部分のあたりは微高地となり、住居跡が存在する可能性もある。

第Ⅰグリッドと同様に第Ⅱ～Ⅲグリッドでも層位的にみると各時代、各時期のものが上下混在して出土するという状況でありながら、量的には上層から順に古い時代のものへと続く傾向がみられた。

出土した遺物は、縄文土器、弥生土器、石器、木製品、漆器、自然遺物等豊富であるが、①東西方向土層をみると若干東側から西側へ傾斜している。②同一土層に各時代、各時期のものが混在している。③出土した土器は大半が小破片で、磨滅したものをかなり含む等の理由から、本遺跡出土の遺跡はそう遠くない所（調査区の東側あたりか？）からの流れ込みによるものとも考えられる。今後検出された遺構や周辺の地形等を検討して判断すべきであろう。

検出遺構

終始湧水に悩まされ、遺構検出に努めたが第Ⅱグリッドで石組み遺構と杭を検出したにとどまった。

石組み遺構は、拳大から人頭大の河原石が比較的集中して存在するものである。これらの河原石は黒色粘土層上に密着して存在し平面上に集積したもので、焼石等は含まれていない。遺構の時代、性格については不明であるが、出土遺物の状況からみると縄文時代まで遡ることも考えられる。

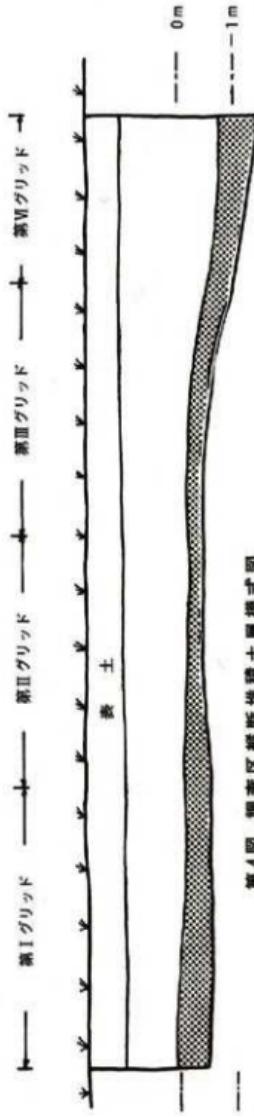
杭は、大小长短さまざまのものが不規則に打ち込まれ、直徑5～10cmのものが多い。杭の頂部は海拔0m前後のものが多く、中には海抜0.4m前後から打ち込まれ遺物包含層まで至らないものも存在する。時代は不明であるが、堆積土層と比較すると大半は古墳時代以降のものと考えられる。溝あるいは排水を目的としたものと考えられるが根拠はない。今後の検討を要する。

こうした遺構以外に、木製品の製造工房が近くに存在したことと考えられる。出土した木製品の中には、板材を加工して数枚の鉄材を切り取る前の段階のもの、完成間近なものがみられる。先にもふれたように、調査区の東側あたりで木製品の製作が行われたのであろうか。

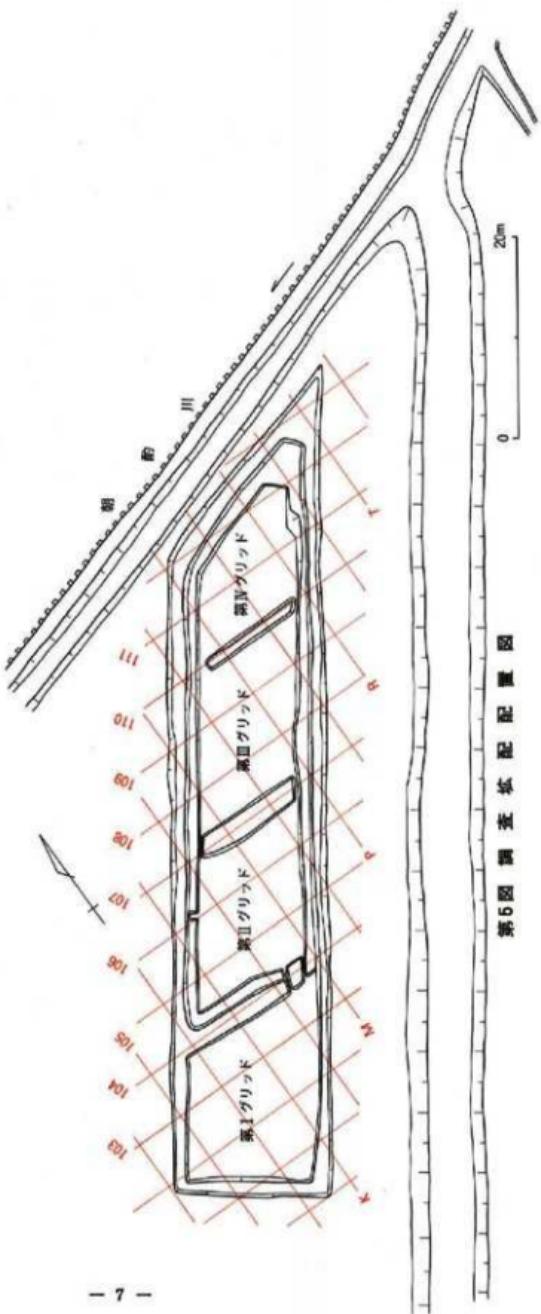
その他

第Ⅲグリッドから第Ⅳグリッドにかけて、自然立木が横転した状態で検出された。長さ5m以上に及び、中心部の径55cmを測る。基部には根が残っているところから、切り倒したものか、何らかの自然的理由で横転したものと考えられる。

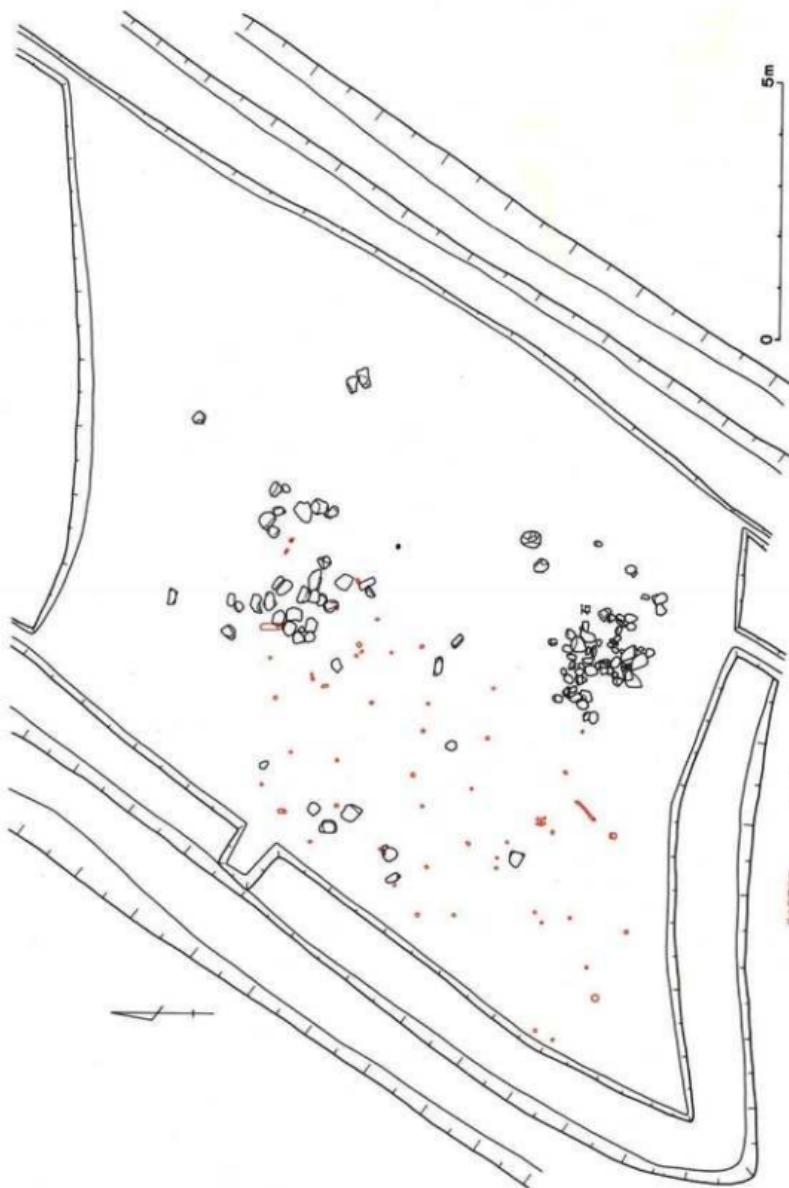
第Ⅳグリッドの北壁付近で、柄を装着した状態の石斧が検出された。これは県内で始めての例であり、数多くある遺物の中で最も注目をあげた。



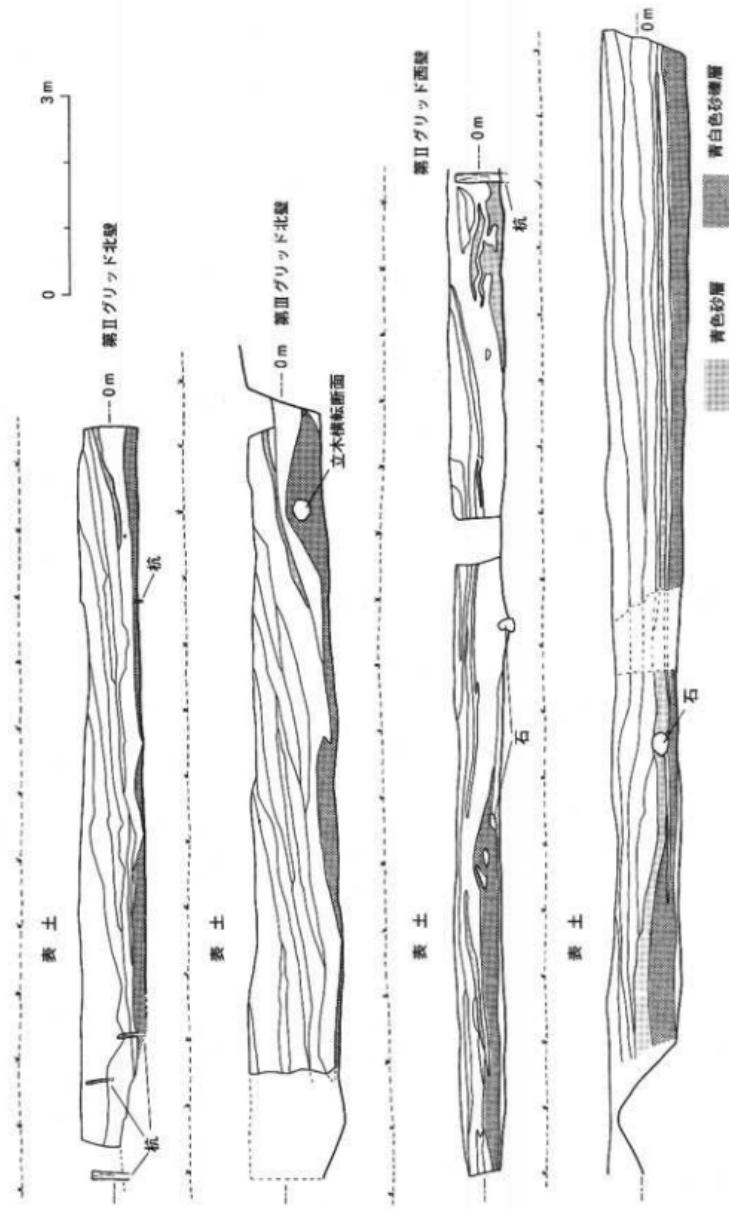
第4図 調査区絶壁積土層模式図



第5図 調査区絶壁積土層配置図



第7図 堆積土層断面図



V 出土遺物の考古学的観察

第3次調査でも多量の遺物が出土した。土器、石器類はコンテナ約70箱に及び、木製品、漆器類は百点余に及んでいる。こうした多量の出土遺物全てを紹介することができないので、その代表的なものを縄文土器、弥生土器、石器、木製品、その他の遺物の順で項を追って略述することとする。

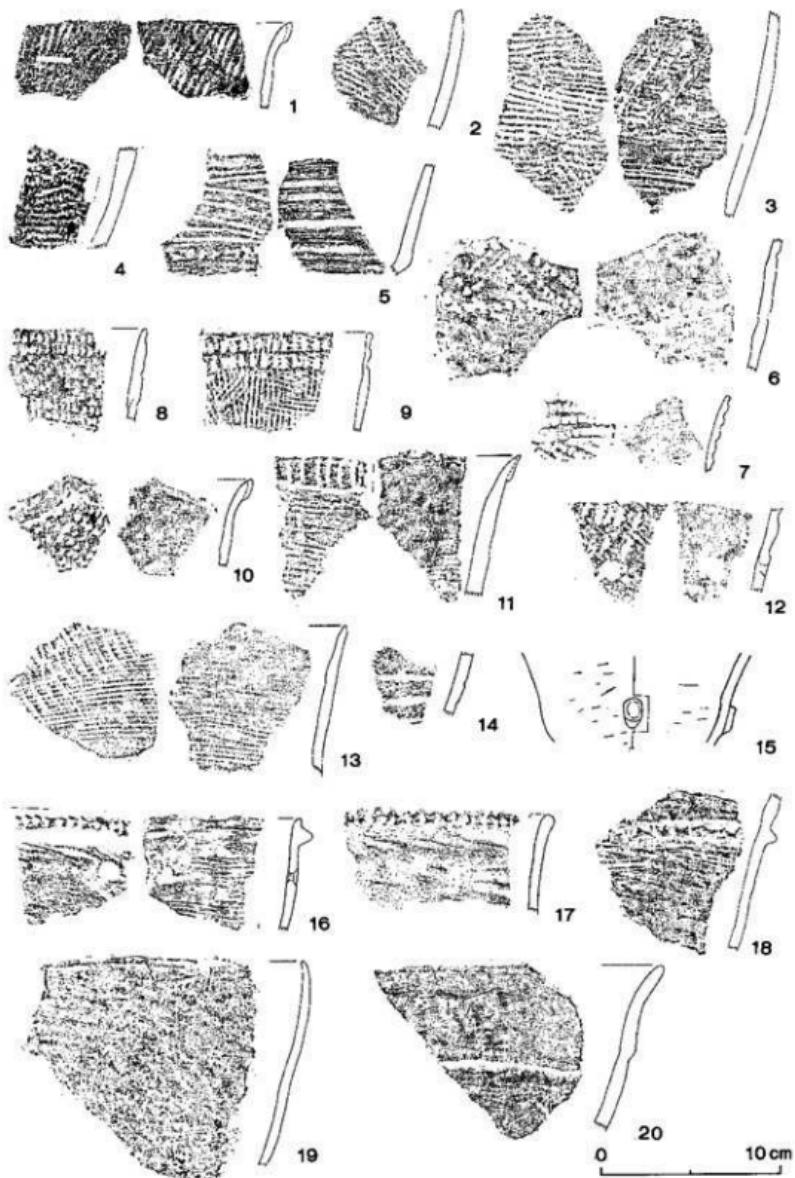
1. 縄文土器 (第8図、FL. 9)

出土した土器は、大半が小破片であり、表面が磨滅したものが多く含んでいる。また単一土層から弥生土器とともに出土していることから、通常の5期に分類することは困難であるが、次のように分けて紹介しよう。

早期の土器 この期の土器はごくわずかである。文様、胎土等で分類すると次のとおりである。
(1) 内外とも縄文を施し、胎土には繊維を含む。焼成は良好である。(第8図1)
(2) 外面に縄文を施し、内面は無文である。胎土には砂粒を多く含み、繊維がみられる。焼成良好である。(同図2)
(3) 内外とも貝殻条痕を施し、胎土には砂粒を多く含み、繊維がみられる。焼成良好である。(同図3)
(4) 内外とも縄文を施すが、内面は不明瞭である。胎土には砂粒を多く含む。焼成良好である。(同図4)
(5) 外面は沈線を施したうえ、屈曲部に爪形ないし刺突文を有する。内面は幅の広い平行沈線が施されている。(同図5)

前期の土器 この期の土器は比較的多い。文様等で分けると、次のとおりとなる。
(1) 押し引き文を施すもので、条痕文のみられるものもある。胎土には若干の砂粒を含む。焼成は良好である。(同図6・7)
(2) 竹管による爪形文を口縁付近に平行して施したもの、斜方向に施したもの、あるいは両方を組み合せたもので、なかには貝殻条痕のみられるものもある。口縁部にはり付け凸帯を有するもの、口唇部に刻み目を有するものもある。胎土には若干の砂粒が含まれているが、総じて少ない。焼成は良好である。(同図8~10)
(3) 貝殻による爪形文を施したもので、貝殻条痕を施した後に施文したものが多い。胎土には若干の砂粒が含まれているが、総じて少ない。焼成は良好である。(同図11~13)

後期の土器 この期の土器は明瞭なものが少なく、わずかに次のものが掲げられる。
(1) 磨滅しているため不鮮明であるが、縄文地に沈線を施したものである。胎土には若干の砂粒が含まれる。焼成は良好である。(同図14)
(2) 鉢形土器の一部で、内外とも粗面の粗製土器であるが、外面に押しボタン状の突出部がある。胎土には細砂が若干含まれている。焼成は良好である。(同図15)。



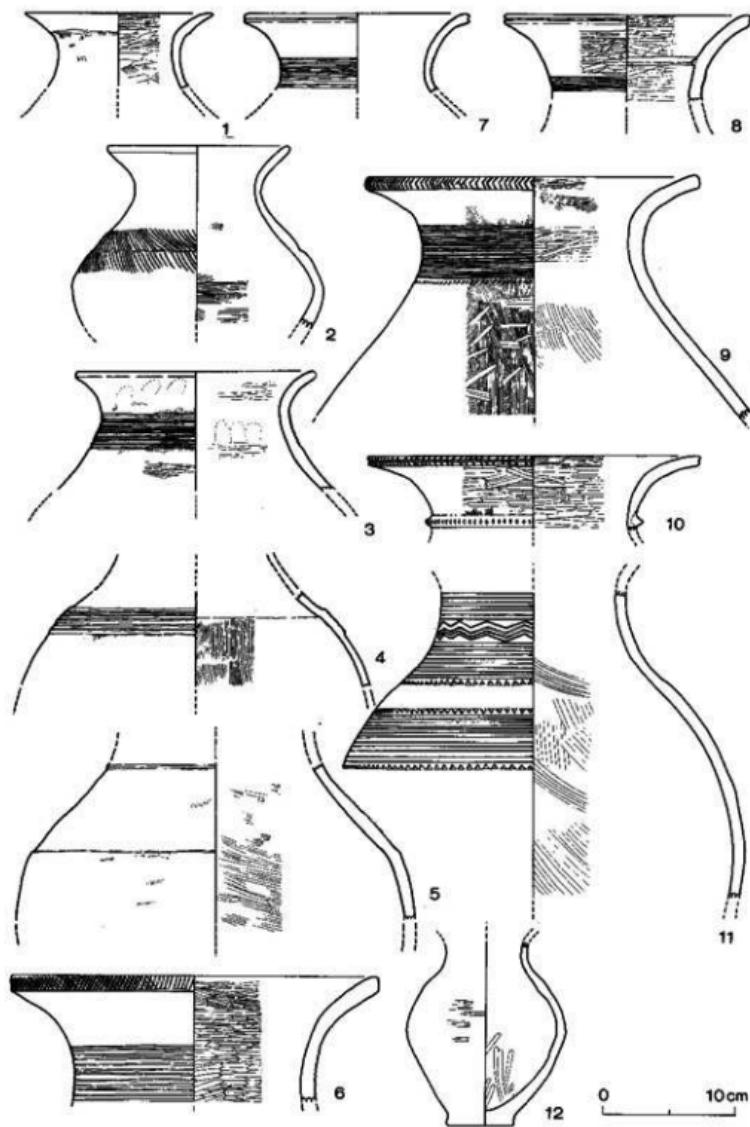
第8圖 楩文土器拓影

晩期の土器 この期の土器が最も多い。主なものを掲げると次のとおりである。(1) 口縁部あるいは口縁部付近に貼り付け凸帯を有し、刻み目を施すもので、条痕文がみられる。胎土には若干の砂粒を含む。焼成良好である。(同図16・17) (2) 口唇部に刻み目を施し、器壁は内外とも無文である。胎土には多くの砂粒を含む。焼成は良好である。(同図18) (3) 内外無文のものである。胎土には若干の砂粒が含まれ、焼成は良好である。(同図19) (4) 内外無文で、口縁部は外反し口縁下部外面には段をつけてある。胎土には若干の砂粒が含まれ、焼成は良好である。(同図20)

2. 弥生土器(第9図～第14図、PL. 10)

今回出土した弥生土器は、コンテナ約60箇分で破片が多い。磨滅したものが多く、单一土層から縄文土器とともに検出されている。土器片のほとんどが前期あるいは中期に属するもので、後期のものは少ない。以下各時期、器種別にその概要を紹介しよう。

前期の土器 壺形土器(第9図) 1は口縁外面にヘラで削りとられた形の段がある。器壁外面の段より上部はなで、下部は刷毛目→ヘラ磨きとなっている。内面は全体に刷毛目→ヘラ磨きである。2は肩部に段を有し、段の上下に貝殻刺突文がある。器壁外面全体は横なものではヘラ磨きの調整が行われ、内面上部はなで、下部は刷毛による調整が行われている。3は頸部に10条のヘラ描平行沈線が施され、沈線下部から脛にかけて段を設けたような形になっている。器壁は内外面とも、横なものではヘラ磨きの調整痕がみられる。4は肩部に凸唇が設けられ、凸唇部には5条のヘラ描平行沈線がある。器壁外面はヘラ磨き、内面上部はなで、下部は刷毛目の調整痕がある。5は肩部に凹唇がある。頸部から脣部への変換点あたりに1条のヘラ描沈線があり、沈線の下から刷毛で削りとられた凹唇がある。器壁外面は刷毛目→ヘラ磨きである。内面はあらい刷毛目がある。6は口唇部外面にヘラ描斜格子文を施し、頸部に13条以上のヘラ描平行沈線を施している。器壁外面はなで、内面は刷毛目→ヘラ磨きである。7は口唇部外面に1条のヘラ描沈線文、頸部に6条のヘラ描平行沈線がある。器壁外面口唇部直下はなで、沈線文の上部はヘラ磨き痕があり、内面はヘラ磨きが行われている。8は口唇部に1条のヘラ描沈線文、頸部に5条のヘラ描沈線文があり、口縁内部には断面三角形のはりつけ凸唇がある。器壁はヘラ磨きが行われている。9は口唇部に貝殻によるくの字状の刻み目があり、頸部に19条のヘラ描平行線文があり、平行沈線文の下には1条の列点文がある。器壁外面の口唇部はなで、頸部～脣部は刷毛目が主体となり部分的にヘラ磨きの痕跡がみられる。内面口唇部は刷毛目を施した後に部分的に横なものでは、頸部はヘラ磨き、頸部～脣部はあらい刷毛目がみられる。10は口唇部に1条のヘラ描沈線文を施し、その上下に貝殻による刻み目がある。また頸部には断面三角形の凸唇があり、ヘラによる刻み目がある。器壁は内外面ともヘラ磨きが行われている。11は頸部～脣部に、ヘラ描沈線文と刺突文がある。器壁外面下半部にヘラ磨



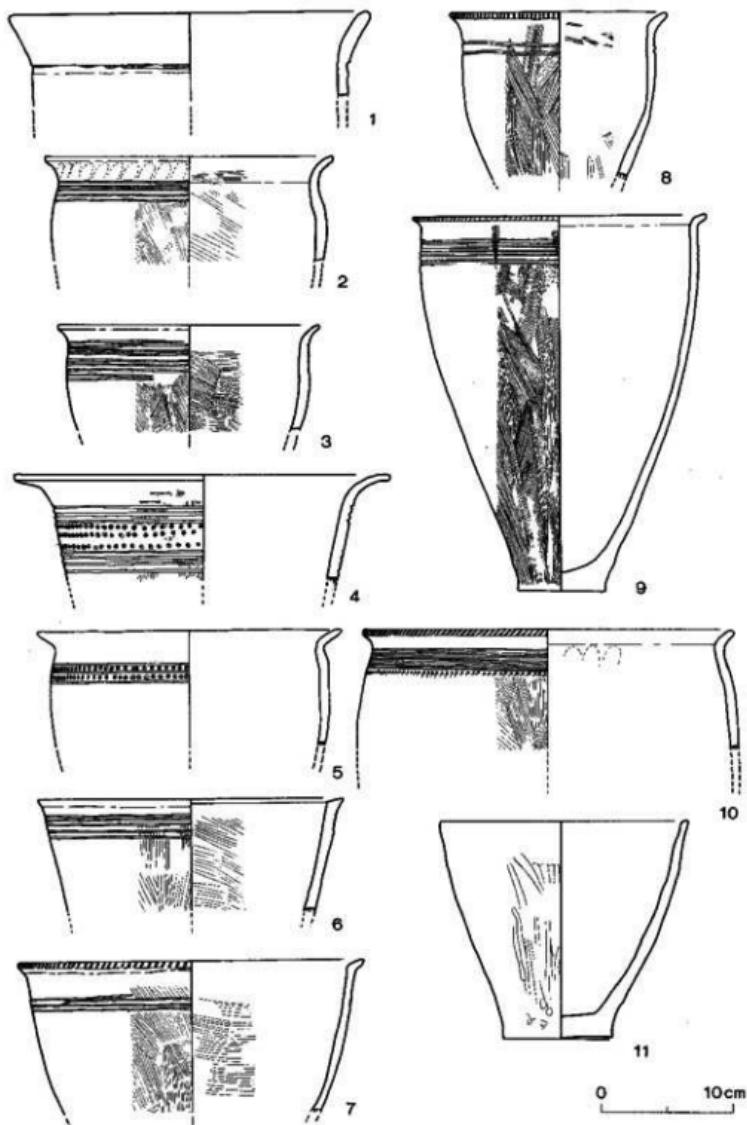
第8図 弥生土器実測図(1)

き痕がみえるが、上半部は不明である。内面上部はヘラ磨き、下半部はあらい刷毛目がみられる。兵庫県播磨地方に多いタイプのものである。12は小形のもので、器壁外面はヘラ磨き、内面は上半部に指圧痕などで、下半部には粗いヘラ磨き痕がみられる。以上の壺形土器以外に、ヘラ及び貝殻により施された土器片（第11図）も多い。

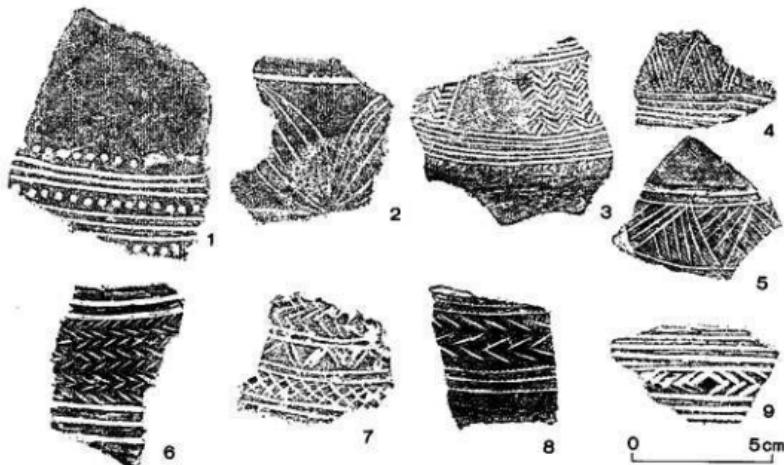
壺形土器（第10図） 全体に胴のあまりはらないものが多い。1は口縁の屈曲部に1条のヘラ描沈線文がある。器壁は外側ともヘラ磨きが行われている。2・3は口縁直下に数条のヘラ描沈線文がある。器壁は内外とも口縁部はなで、口縁直下は刷毛目がみられる。4・5は口縁直下にヘラ描沈線文と竹文がある。器壁は4の場合、口縁部の外側とも横なで、口縁直下に若干の刷毛目がみられ、内面は刷毛目→ヘラ磨きとなっている。6は内外とも上半部が横なで、下半部がヘラ磨きとなっている。6は口縁部が外反しないもので、口縁直下に5条のヘラ描平行沈線文がある。器壁は外側とも口縁部で横なで、胴部で刷毛目がみられる。8・9は口唇部に刻み目を施し、口縁直下に数条のヘラ描平行沈線文を有するタイプのもので、9は完形品である。器壁外面は横なで、刷毛目がある。内面は8の場合横なで、刷毛目、ヘラ磨きとなっているが、9は全面ていねいなで調整が行われている。いずれも、器壁外面にはかなりの煤が付着しているが、9は底部から13cm位の間は付着していない。10はやや脛のはるもので、口唇部に刻み目を施し、口縁直下に7条のヘラ描平行沈線文と1条の刺突文を有する。器壁外面は口縁部はなで、胴部は刷毛目がみられる。内面は全面なで調整となっている。

鉢形土器（第10図） 7は口唇部に刻み目をなし、口縁直下に3～4条のヘラ描沈線文がある。器壁外面は口縁部がなで、胴部は刷毛目がみられる。内面は口縁部はなで、下部は刷毛目→なでとなっている。なお、器壁外面上部には煤が付着している。11は口縁の外反しないものである。器壁内外とも上部はなで、下部はヘラ磨きとなっている。内面には煤が付着している。

中期の土器 壺形土器（第12・13図） 1～3は口縁部が朝顔形に開き、口唇部が肥厚し頸部に凸帯文をもつものである。2は口唇部に浅い凹みがみられる。器壁はなで、刷毛、ヘラ磨きの痕跡がある。4は口唇部を欠損している。頸部に格子状の凸帯文を有する。器壁外面はヘラ磨き、内面はなで→ヘラ磨きとなっている。前期のものとも考えられる。5は口唇部に斜格子文を施し、肩部に浮文、櫛描平行沈線文、櫛描波状文がある。器壁外側ともヘラ磨き痕がみられる。8～13は1～3と同様のタイプであるが、口唇部及び口縁部内面に刻み目、刺突文、斜格子文、平行線文、円形浮文、波状文等の文様が単独あるいは組み合せられた状態で施されている。14図-8～10は小形のもので、口縁付近に小孔のあるものもある。10は手づくねである。6・7は底部にあたり、いずれも脣部のはるものである。9の器壁外面はヘラ磨きで、底部は完全な平底である。内面は底部のなでをのぞき、全体に刷毛目がみられる。7の器壁外面は全体にヘラ磨き痕がみられ、底部付近～底



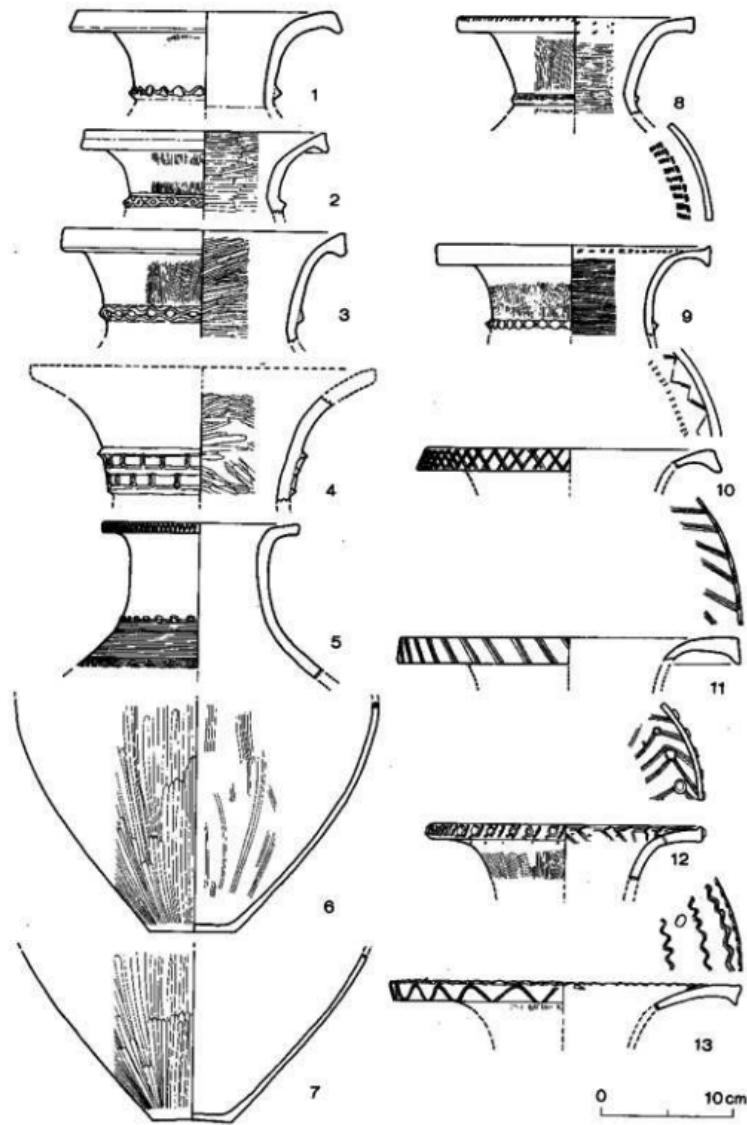
第10図 弥生土器実測図(2)



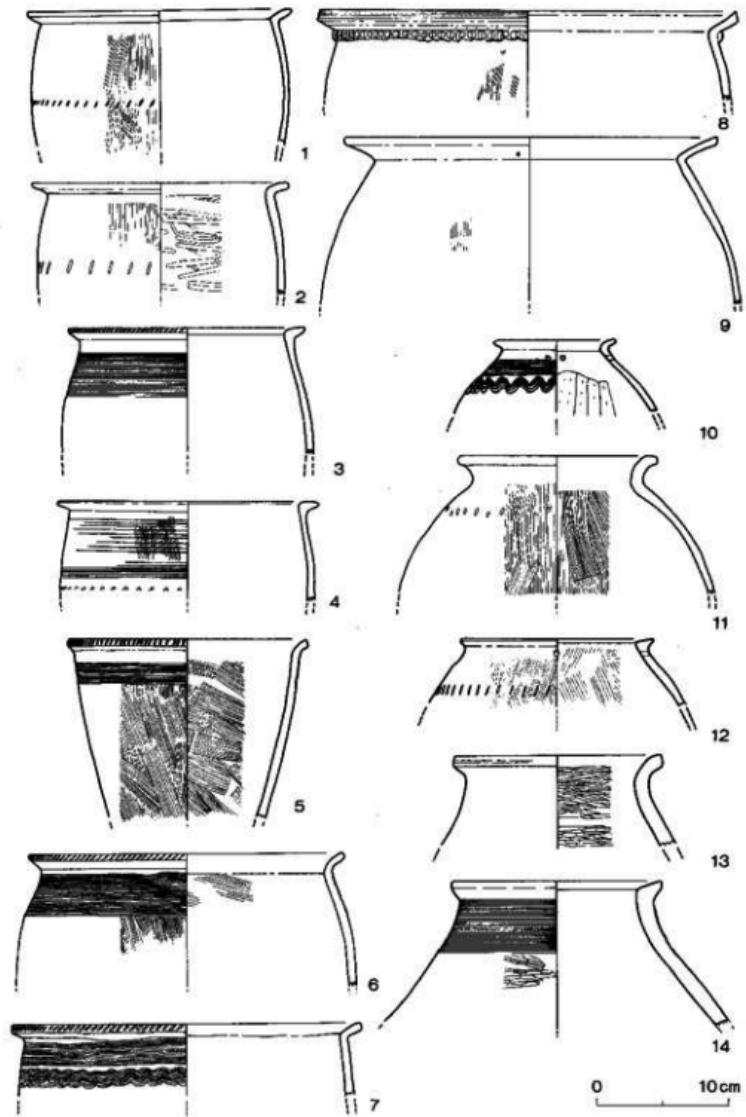
第11図 弥生土器拓影

部はなでの痕跡がある。14図—12は脚付きのものである。器壁は風化が激しく明瞭でないが、脚部外面はヘラ削り痕、上部内面はていねいなヘラ磨きがみられる。

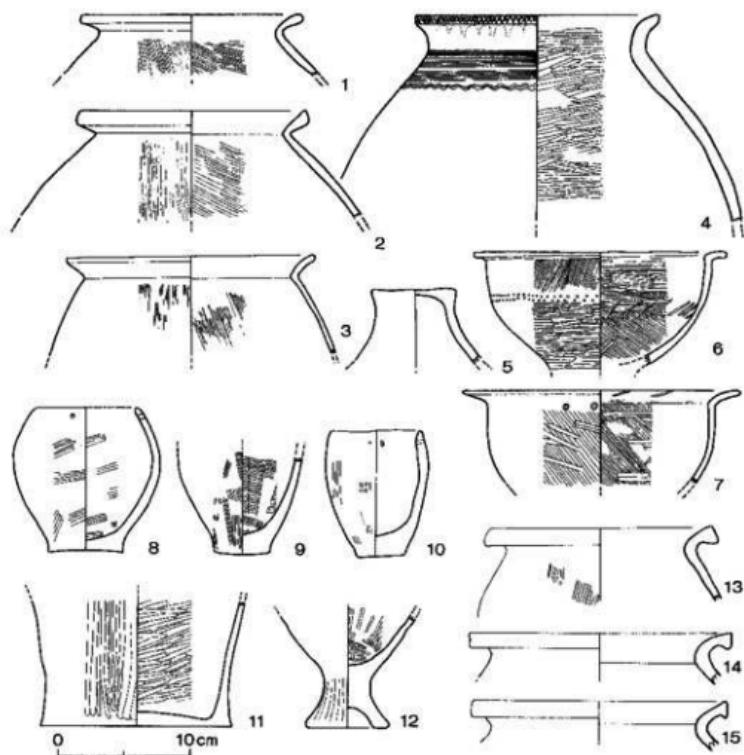
斐形土器（第13・14図） 形状から大きく分類して、A脇のはらないもの、B若干脇のはるもの、C口径が大きくて若干脇がはるもの、D口径が小さくて脇のはるもの4種がある。Aタイプのものには5がある。これは、口唇部に刻み目を施し、口縁直下に櫛描平行線文を施している。器壁の内外面は横なで、刷毛目がみられる。外面上部には煤が付着している。Bタイプのものには、1～4がある。刺突文、櫛描平行線文等が施されている。器壁の調整はなで、刷毛、ヘラ磨き等がある。Cタイプのものには、6～9がある。このうち6・7は口唇部があまり発達しないもので、口唇部に刻み目を施したり、口縁直下に櫛描文が施されている。8・9は口縁部が発達してやや外反気味である。8の場合は、口唇部に2条の沈線が施され、くびれ部に凸帶文を有する。9は特に文様等を施さないが、口縁部及び脇部に櫛般痕がみられる。器壁の調整はなで、刷毛、ヘラ磨き等がある。Dタイプのものには、10～14、14図—1～4がある。10は頭部に一对の小孔が穿たれ、肩部には4本単位の櫛描平行沈線文、波状文が施されている。器壁外面はなで、内面はヘラ削り→なでとなっている。11は脇部に列点文がある。器壁外面は、口縁部で横なで、頭部～脇部で縱方向の刷毛目があり、部分的に刷毛→なでとなっている。内面は、口縁部で横なで、頭部～脇部で縱方向の刷毛目がみえる。12は口唇部に幅1.5cmのやや内傾する平坦面があり、頭部には小孔が穿たれている。器壁外面は口縁部でなで、頭部～脇部で刷毛目がみえる。器壁内面は刷毛調整となっている。13は



第12圖 亦生土器実測図(3)



第13図 弥生土器実測図(4)



第14図 邪生土器実測図(5)

口縁部に不明瞭であるが、浅い凹線状のものがみえる。器壁外は口縁部がなで、頸部以下はヘラ磨きとなっている。内面は口縁部でなで、頸部以下で刷毛→ヘラ磨きとなっている。14は口唇部に幅2mmのやや内傾する平坦面を有し、頸部には25条の横描平行沈線文がある。器壁外は口縁部で横なで、横描平行線文の下はヘラ磨き→なでとなっている。内面は剥落しているため不明である。

14図-1～3は口縁部がくの字状に外反するものである。1は器壁内外とも横なで、肩部以下は刷毛目が施されている。2は口唇端がつまみあげられた形となっている。器壁内外とも口縁部は横なで、肩部以下は刷毛目が施されている。3は器壁がかなり剥落しているが、内外面とも口縁部で横なで、肩部以下は刷毛目が施されている。4は口縁部にヘラ状工具による刻み目が施され、肩部には4本単位の横による平行沈線文と3木単位の横による波状文が施されている。器壁外は、

なで仕上げとなり、器壁内面はヘラ磨きとなっている。

その他(第14図) 5は蓋と考えられる。器壁外面頂部はなでとなっているが、側面は不明である。内面は指圧痕が残り、その上になでの痕跡がみえる。6・7は脚部は存在しないが、高杯と考えられる。6は口縁が逆L字状に開くもので、器壁外面に2列の列点文が施されている。口縁の屈曲部～列点文は刷毛目、列点文の下部はヘラ磨きとなっている。内面は、口縁部で横なで、口縁屈曲部の下はヘラ磨きとなっているが、部分的にノの字状にヘラの痕跡がみられる。7は口縁の屈曲がややゆるやかになり、屈曲部に小孔2が穿たれている。器壁外面は口縁部で横なで、屈曲部下は刷毛→部分的にヘラ磨きとなっている。内面は口縁部で刷毛→横なで、屈曲部以下で刷毛→ヘラ磨きとなっている。

後期の土器 変形土器(第14図) 13は口縁の肥厚するタイプのもので、器壁外面は口縁部で横なで、頸部以下は刷毛目がみえる。頸部には刷毛による調整時の浅い段(沈線状を呈する)が認められる。器壁内面は口縁部でヘラ磨き、頸部下でヘラ→なでとなっている。14・15は複合口縁のもので、内外面とも口縁部はなでによる調整が行われている。

3. 石 器(15図、PL. 11)

今回の調査で検出された石器には、石斧、石鎌、石庖丁、石剣、砥石などがあり、その量は、およそコンテナに2箱である。

石 斧 始刃磨製石斧1と打製石斧11がある。1は柄付のまま検出された石斧である。長さ14.6cm、身最大幅5.6cm、刃幅4.3cm、厚さ4.0cmで、^{はくさいせん}荒削岩製である。刃先角は、88度あり、器表面全体に細い研磨痕がみられる。切刃面は使用のため摩耗している。基端面は、打撃痕や研磨痕がみられる。11は一部が欠損したもので、長さ7.3cm、刃幅5.8cm、厚さ2.1cmある。基端面は打撃後研磨している。

石 鎌 2点あり、いずれも隔壁座の黒曜石を加工したもので、逆刺式である。2は長さ2.3cm、厚さ0.4cm、3は長さ2.4cm、厚さ0.4cmである。3は一部欠損する。

石庖丁 4は、一部欠損したもので、現存6cm、刃幅5.3cm、厚さ0.3cmある。黒色頁岩製である。切刃部分は背面から1cmばかり等量の研ぎ出しをしている。ただし、一方の面が段をつけないで刃をついているのに対して他の面は2段に研いでいる。紐通し穴は2孔あり、1孔は欠けている。孔は両方からあけており径6.5mmである。

刃 器 5は一部欠損したもので、幅5.2cm、刃幅4.5cm、厚さ3.5mmある。黒色頁岩製である。切刃の端部は研磨している。刃先の研磨についてみれば一面は7mmを丸く研ぎ出し、他の面は2mm研ぎ出している。刃先角は46度である。

石庖丁 6は外溝刃を呈する石庖丁と考えられるが、一部は欠損する。高さ5cm、幅5.1cm、厚

さ0.4cmである。刃先は両面から研磨しており、刃先角は22度である。刃部は刃こぼれしており、表面は薄板状にはがれ、もろくなっている。

刀子状小形磨製石器 7は板状の頁岩か玄武岩製の別片を使用して、擦切によって平面を切先形の材につくる。長さ5.6cm、最大幅2.6cm、背の厚さ0.5cmである。背は擦切後折ったのち研磨して平坦にしている。A面右側はB面から擦切の溝を入れ折りとっている。A面左側は剝片の端部にあたり薄い。そして、A面は、主要剝離面をそのまま残し全面研磨するとともに、刃部にも研磨を入れて刃をつくり出している。B面は調整剝離面をそのまま残し、その一つが刃部の役割を果している。8は7と同様の石質で、扁平な横長の板状の材を利用している。長さ9cm、幅2.9cm、背の厚さ0.4cmである。背側の両面から擦切り溝を入れたのち折って横長の材としている。背には折った時の残存部がある。刃部はA面では二次調整の剝離を加え、B面は研磨して、刀を作っている。

石庵丁未製品 9は扁平な板状の頁岩か玄武岩製の石材を使用したものである。三方を擦り切り後、刃部を打製し、その面を研磨して形を変えようとしている。背部近くには浅い溝があり、擦り切り溝を入れなおした形跡がある。高さ7.3cm、幅10.55cm、背部厚さ0.85cm、刃部厚さ0.4cmである。

石劍 10は横剥ぎの扁平な玄武岩製と思える剝片を加工して作った局部磨製石劍である。鋒部分を欠失しており、関節側の部分が長さ8.05cm残存している。最大幅4.5cm茎尻から2.3cmのところに抉入部があり、その幅2.9cm、厚さ0.7～0.9cmである。

打製石器 11は長さ7.3cm、幅5.8cm、厚さ2.1cmである。上縁は打撃整形後研磨されている。

磨製不定形石器 12は長さ5.8cm、幅4.9cm、厚さ0.8cmのものである。A B両面や側縁に研磨がみられる。

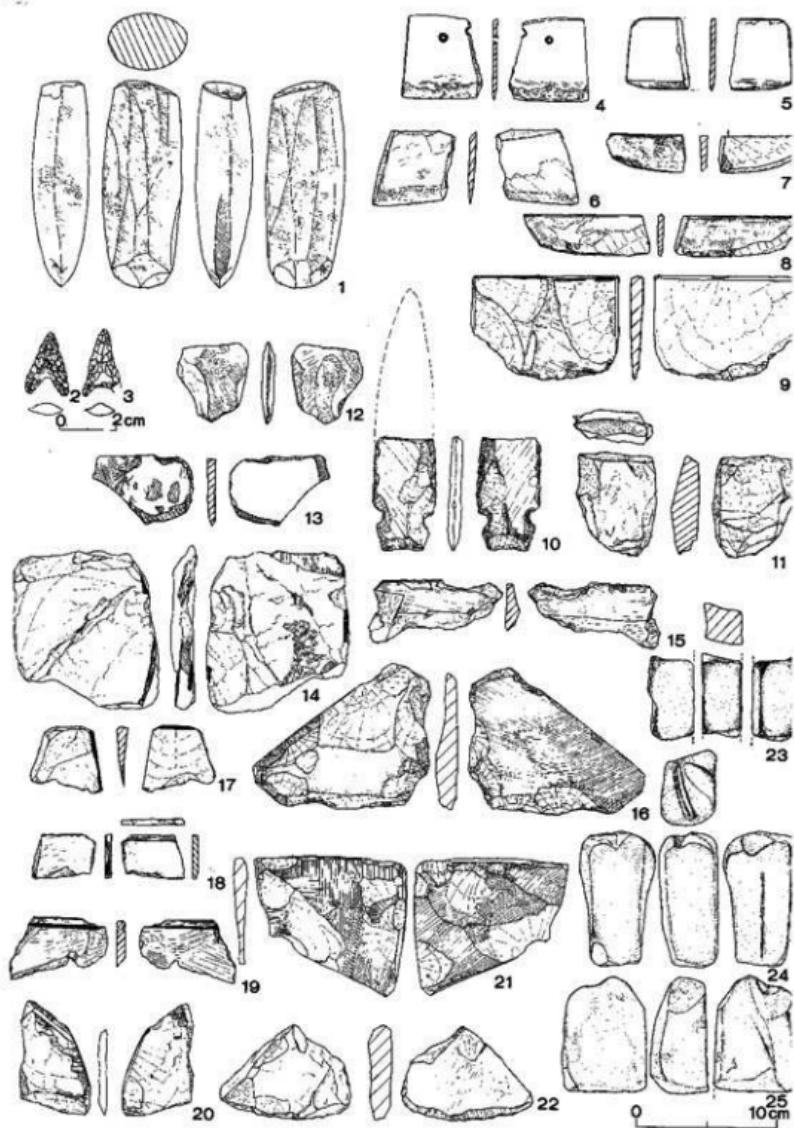
不定形刃器 13は長さ7.1cm、幅5cm、厚さ0.6cm。五つの刃をもつ板状石の二側縁を刃部に仕上げている。刃部はA B両面から研磨を行なうが、A面側の研磨面が広い。

擦切石器未製品 14は緑灰色のち密な石材を利用したもの。長さ10cm、幅11.5cm、厚さ1.5cmである。擦切によって大きさを作っている。15は長さ9.5cm、幅4.5cm、厚さ0.5～1cm。A Bの両面方向から擦切りを入れたのち折っている。両面の平坦部には研磨が施されている。

局部磨製削器 16は頁岩か玄武岩質の扁平な石材を使用している。長さ12.5cm、幅10.3cm、厚さ0.8～1.6cm。A B両面とも四方から剝離を加えている。B面にくらべてA面に剝離面が多い。刃部と考えられるところには二次加工と研磨が施される。

17は長さ5.1cm、幅4.8cm、厚さ0.8cmある。断面はクサビ形を呈する上縁には擦切痕がある。そして、上縁と側縁の一方は、縱方向の研磨としている。刃部は未加工である。

18は緑色凝灰岩系の板状の石材と思えるものを使用している。長さ4.4cm、幅3.1cm、厚さ0.4cm。A B両面とも研磨される。B面上縁から0.3cmのところに擦切のあとがある。正製作のためかと思



第15図 石器実測図

われる。

19は長さ7cm、幅4.4cm、厚さ0.6cmある。上縁から0.4~0.5cmのA・B両面に擦切痕がある。これはA面、B面でずれがあるが、外周は研磨される。玉製作のための加工棒材用原材とみられる。20は頁岩か玄武岩質の板材の石材を利用している。長さ5cm、高さ7.5cm、厚さ0.6cmある。側縁の1つは擦切り加工される。両面とも主要剝離面をもち、部分的に研磨されている。

不定形刃器 22は長さ9.3cm、幅6.2cm、厚さ1.7cmある。刃部はA・B両面からの剝離調整によっているが、一部は研磨している。B面中央部に径1.5mmの孔を穿っている。

石磨丁未製品 21は頁岩か玄武岩製の板状石材を利用したもの。長さ10.7cm、最大幅9.5cm、厚さ0.3~0.7cm。A・B両面とも四方から剝離を加えたのち、2カ所に擦切り溝を入れ、打裂したのちその面を研磨しているようである。穿孔のための小孔が、A面中央部に1カ所、B面左辺側に2カ所ある。

砾 石 23は現存長6cm、幅3.8cm、厚さ2.3cmで、きめの細かい砂岩製である。三つの面を紙面としており、中央部は使用によってわずかに凹んでいる。24は現存長9.5cm、最大幅5.4cm、厚さ4cmであって、砂粒のやや粗い砂岩製である。四つの側面を紙面として使用しており、それぞれの面の中央は凹んでいる。1つの面には、幅2mmの細い一条の溝が残る。25は現存長8.2cm、幅6cm、厚さ4.2cmで砂岩製である。

4. 木製品 (16図、17図、18図、19図、PL. 12~16)

木製品は各種のものが多量に検出されている。それらは、鍼、鎌、容器、機械具、狩猟具などの製品と未製品などである。

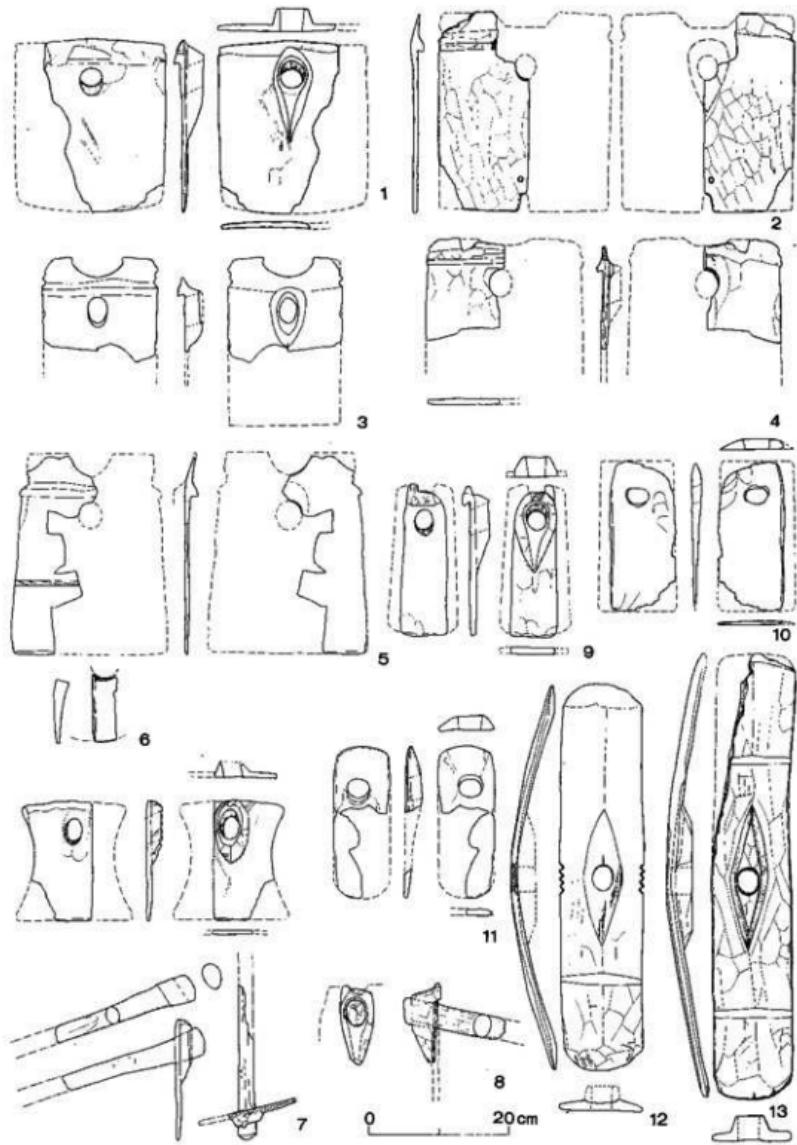
以下、主要なものについてその概要を記すこととする。

鍼 (16図)

青白色砂礫層の木材集積部で検出されたものである。以下、特に記した以外は木材はカシ類であり、極目で縱木取りをしている。

広 鍼 1は身の長さ24.6cm、復原幅21.0cm、厚さ0.8cmである。肩部は中央で外方にいくらくかふくらむ。刃先は外方へゆるやかにふくらむ。舟形隆起部分は、高さが2.4cmで、柄孔の径は3.8~3.2cmで縱長の梢円形を呈する。着柄角度は69度である。ゲタがつく肩部には、三角形の抉り込みがある。

2は身の長さ28.4cm、復原幅24.4cm、厚さ0.7cmで、身の半分が残存する。肩部は、上底9.2cm、下底5.4cm、高さ2.4cmの逆台形の抉り込みが中央部分にある。舟形隆起部分は欠損し、その痕跡が残る。ゲタをもつ。刃先部は中央部分がわずかに外方にふくらみ、かつ抉り込みをもつ。この抉り



第16図 木製品実測図(1)

込みは長さ2.6cm、幅2.0cmである。刃先に力が加わる関係か抉り込みから身の中央側へ2.0cm離れたところに径0.6cmの袖修孔がある。側縁は平縁となっている。肩部に近い両側縁にはV字状の刻目がある。身の波瀬とともに削りは丁寧であるが、裏面がより丁寧で細かい削りとなっている。

3は身の肩部側半分ほどが残存する。身の復元長24cm、幅16cm、厚さ0.5cmである。肩部には円弧状の抉り込みが中央につく。また、肩部に近い両側縁には2つの連続するV字状の刻目がつく。舟形隆起は高さ2.0cmで、柄孔は縱長で径4.3×2.6cmである。着柄角度は、75度である。ゲタをもつ。刃先調は欠失している。身の厚みが0.5cmと大変薄手のつくりが特徴である。

4は身の一部が残るもので、残存長14.5cm、復原幅21.0cm、厚さ1.0cmである。頭部は、両端から7.0cmのところから内へ1.0cm弧状に凹んでいる。舟形隆起とゲタをもつ。柄孔は復原径4.0cmである。舟形隆起は痕跡のみである。

5は身の一部が残るもので、復原長さ28.5cm、復原肩部幅22.8cm、復原刃幅23.8cm、厚さ0.6cmである。肩部幅に比べて、刃幅の方が広いものである。舟形隆起をもち、ゲタがつくものであろう。ゲタは肩部から4.2cmのところにつく。また頭部には、半円形の抉りがある。

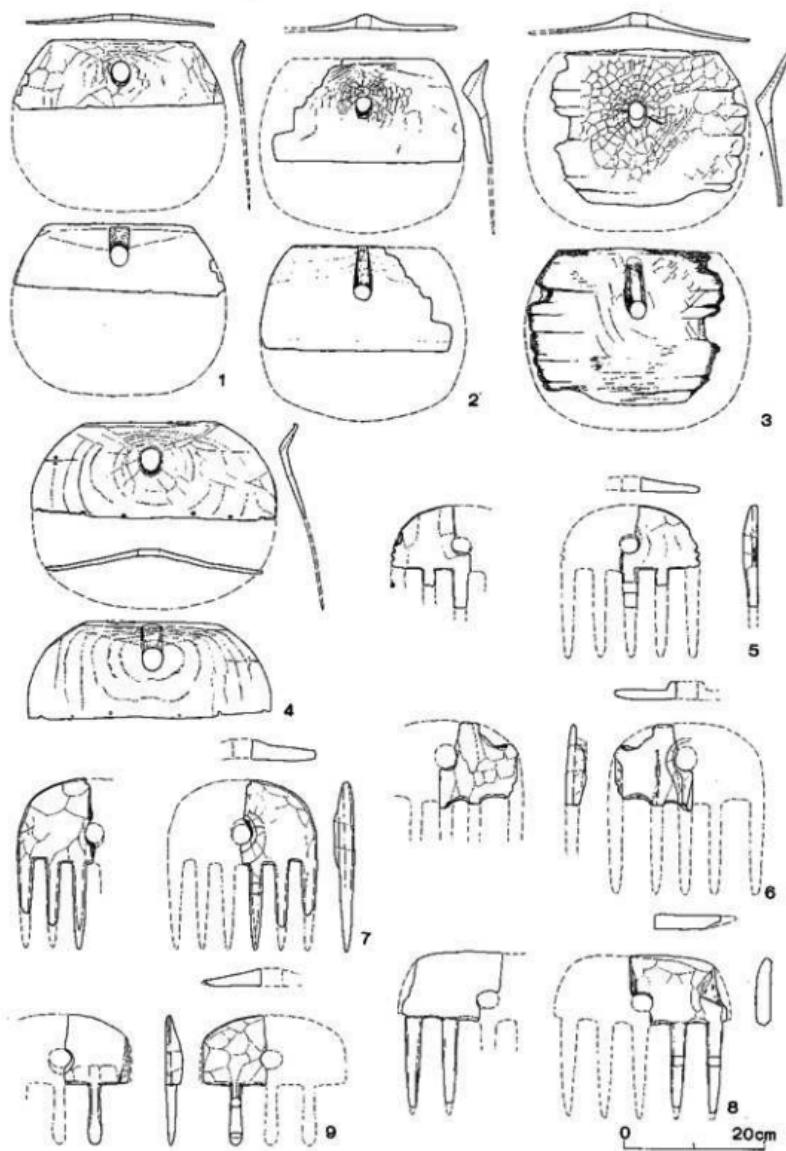
丸 鋸 6は一部が残るものである。現存長9.6cm、幅3.6cm、刀部の厚さ0.5cmである。刃先は、外方へ弧状に反るものである。

鎌 7は柄付の鎌である。身は平面形が、臼形を呈する。長さ17.2cm、肩部復原長14.6cm、刃幅16.0cm、厚さ0.7cmで、両側縁は中央が弧状に内湾する。内湾した部分の幅は10.2cmである。柄は、現存長22.0cm、径2.6cmであり、柄部分では、径3.8cmある。さらに先端はそれより太くなっている。着柄角度は、66度である。この鎌は柄が残っており、その着柄状態をみると柄に対して鎌身の中心軸が直交せず左側に明らかに75度傾き着柄されており、その用途を考える上で興味深い資料である。

8は鎌の舟形隆起部分と柄が着いた状態で検出されたものである。舟形隆起は長さ10.8cm、幅4.8cm、高さ3.2cmである。舟形隆起につづいて肩の一部が残存している。これは抉り込みをいれるものである。柄は残存長14.7cmで、径3.8cmの断面が梢円形を呈する。7同様鎌身を着柄する側が太くなっている。着柄角度は76度である。ゲタがつく。

狭 鋸 9は身の長さ21.7cm、肩部の復原幅8.0cm、刃先復原幅10.0cm、厚さ1.0cmである。高さ2.0cmの舟形隆起とゲタがつくものである。肩部は両端をハの字状に切ったのち、中央部分をU字状に幅2.4cm、高さ1.2cm抉り込んでいる。着柄角度は67度である。

10は身の長さ21.2cm、幅9.3cm、中央部の厚さ1.5cmである。柄孔部周辺は山形にゆるやかに隆起し、厚さ1.5cmとなっている。柄孔は幅広で、径2.2~3.1cmである。肩部は両面から削られ尖り気味となる。刃先部も薄く尖っている。



第17図 木製品実測図 (3)

11は身の長さ21.7cm、幅8.0cm、厚さ0.9cmである。肩部及び刃先は平面形でみると弧状に外反する。この外反は、肩部に比べて刃先がより大きい。柄孔部周辺は舟形隆起の形態をなさず、山形に緩やかに隆起する。柄孔は、横広の円形で、径3.2～3.6cmある。

狭鋸（両手鋸） 12は身の長さ54.4cm、幅11.4cmである。刃先側は、外方は弧状に反っている。柄を着装する部分の身の両側縁にはV字状の刻みを4個ずつついている。身の中央には稜線があり、断面は扁平な菱形に近い形状を呈する。側面からみた場合、刃先の両端を結んだ線と着柄部分の外側からの距離は6.6cmである。刃先の切刃角は約25度である。刃部には、使用痕が明瞭に残る。

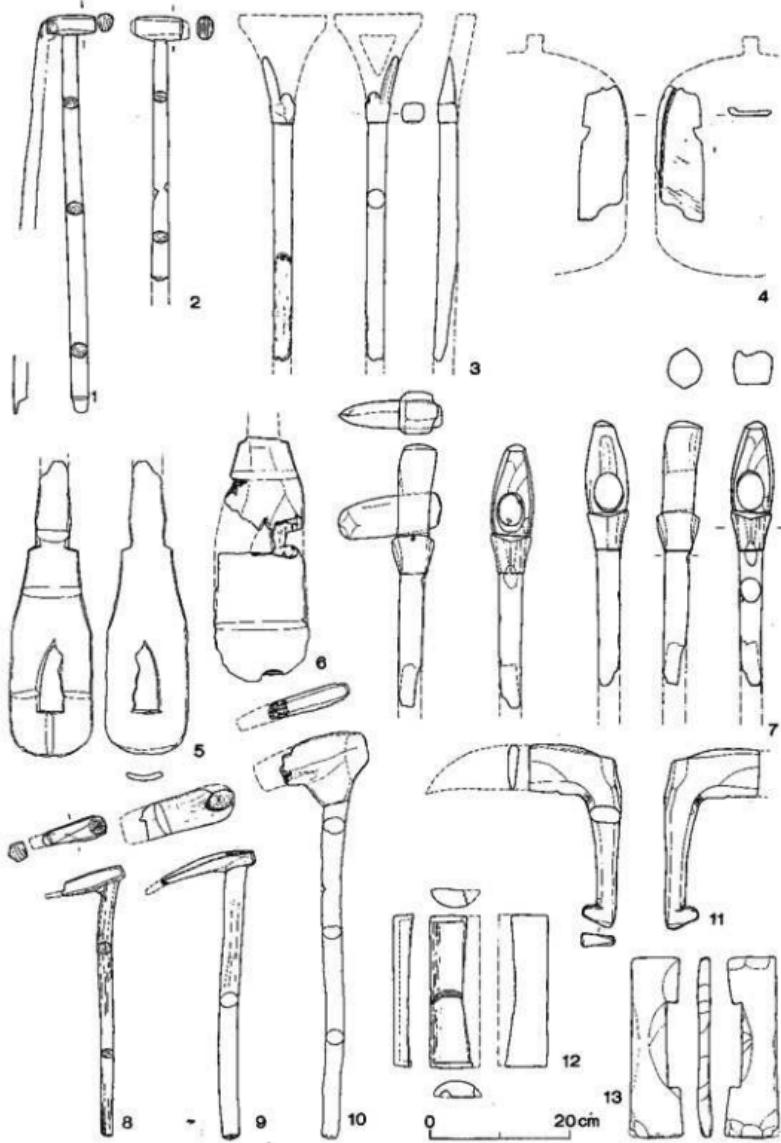
13は身の長さ62.3cm、幅11.2cm、厚さ1.4cmである。刃部の厚さは1.6cmである。刃先は、丸みを帯びている。着柄部の厚さは2.2cmで、柄孔の径は4.0cmである。身の中央には、稜線がある。側面からみた場合刃先の両端を結んだ線と着柄部分の外側からの距離は5.6cmである。縁は平縁である。全体に身の部分と刃の部分には、大まかな加工痕が残っている。内側に着く舟形隆起は広鋸のそれに比べ、全体にがっしりと作られており、長さ、厚さをとってみても大きく、明らかに使用の際に力が大きく加わることを想定し作られている。刃部には使用の際の摩耗が著しい。

12、13とも着柄角度は90度を示す。14は柄孔が手前側が外側に比べ0.5cm程大きいが、使用の際に開いたものと思える。

鍔 (17図、PL. 12、13)

丸 鍔 1は全体に丸味のある形状をし、身の長さ(身丈)よりも刃幅の方が広い鍔で、横鍔とも呼ばれているものである。刃は木目に平行して作られている。身のうち頭部が3/4あまり残存する。復原すれば長さ24.5cm、幅30.0cm、頭部幅20.4cm、厚さ0.3cmである。柄孔は頭部から3.0cmのところに作られ、縦長の径3.5～2.6cmの孔である。隆起部の高さは2.3cmである。2は身のうち頭部が半分以上残存するものである。復原すれば長さ25cm、幅29cm、頭部幅20.0cm、厚さ0.5cmである。柄孔は径3.2～2.3cmある。3は身のかなりの部分が残存する。復原すれば、長さ26.0cm、幅30.5cm、頭部幅23.0cm、厚さ0.5cmである。柄孔は径3.6～2.3cm、隆起部の高さは5.2cmである。鍔身の縁部周辺が黒く焼け焦げており、そのためと思われる木理に平行したヒビが、全体に入っている。4は半分が残存し板目材を横木取りしている。長さ現存13.6cm、推定長26.5cm、幅35cmある。中央部で横に割れたからか、径0.4cmの補修孔と考えられる孔が6個ある。柄孔は、倒卵形に近いもので、径3.7×2.9cmある。両端を結んだ線と柄孔までの距離は3.2cmあり、柄孔部分の厚さ1cm、縁部は0.5cmある。補修孔は、この鍔の機能を考える上で興味深いものである。

又 鍔 5(部分)は5股のもので、5股のものは西川岸遺跡の場合3個出土している。板目材の縦木取りである。頭部が丸く、肩部には2つの半円形の抉りがある。鍔身の長さ現存14.5cm、復原21.5cm、幅現存11.3cm、推定19.5cm、厚さは中央部で2.0cm、縁部は1.0cm、爪は現存長5cm、推



第18図 木製品実測図(3)

る。柄孔は横長の円形で径 2.6×2.9 cmある。着柄角は78度を示す。

6 (部分) 身の長さは現存長12cm、復原長24cm、幅は現存11cm、復原22cm、厚さ1.5cmである。股は5股と推定される。そして、その中央部の間隔は2.5cmずつ、両側は4cmであって、外側が広い。股の基部は両面からの削りをしている。頭部外縁は両面とも面取りしている。縦推定10cm、横推定6cm、厚さ1.7cmを測り、高くしっかりとした舟形隆起をもっている。柄孔は長円形で 3.3×3.1 cmと推定される。全体として、身表側へ滴曲するような形状をしている。着柄角度は83度である。

7は(部分) 身の長さ24.1cm、幅は現存10.7cm、復原21.4cm、厚さは2.0cm、縁部で1cmある。残存部の股の遺存状況から6股のものであろう。前りは、表側が丁寧で裏側は大らかである。頭部は丸い。着柄隆起は、頭部側については、徐々に肥厚させ、股側については舟形隆起状に削り出している点が特徴的である。柄孔は梢円形で 3.6×3.0 cmある。股の加工は表裏両方から行われ、中心部には破がある。そして股の先端部の断面は、円形に近い。股下の長さは両端のものは12.7cm、内側のものは12.2cmある。刃先はかなり使用されたらしく摩耗が著しい。中軸線付近で割れている。着柄角度は74度である。

8は身の長さ現存長21.5cm、復原23.2cm、現存幅14.0cm、復原推定幅25.0cm、厚さは2cmある。股は5股と推定される。断面かまぼこ状の頭部と股の部との境の両端には抉りがある。また刃(瓜)との間には0.1cm程度の段がある。刃の先端は欠損するが長さは13.5cmある。柄孔は横長の円形で、 2.7×3.1 cmある。隆起はなく、縁部に比べて厚く作っている。表側は、削り整形加工がみられるが、裏面は削った面をそのまま利用した感じである。着柄角は約80度である。

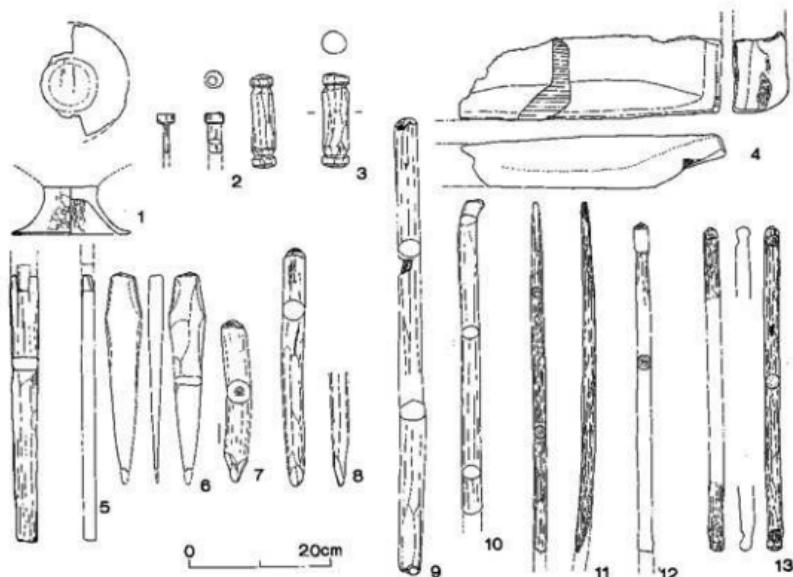
9は柱目に近い板目材の縦木取りで、3股と推定される。身の長さ18.6cm、幅は現存9.4cm、復原幅20.5cmある。隆起部の厚さは2.5cmである。柄孔は推定径2.6~3.2cm、刃の間隔は3.2cm~3.4cmである。刃の長さは8.5cm、その幅先端部は1.8cm、基部で1.4cm、断面の形状は、基部においては円形に近く、先端部はかまぼこ形である。

錆の柄、木鐘状木製品など (18図、PL. 14)

錆の柄 1は1木つくりで、現存長56.4cm、径1.8~2.4cmである。柄の握りは主軸と直交しT字形をする。握部は柄から統く軸線に加えて片方に突き出て作られている。長さ6.8cm、幅2.7cm、厚さ2.2cmである。柄の径は錆身に近い方がいくらか太い。

2は、現存長37.4cm、太い部分で径 1.6×2.4 cm、握部は長さ6.7cm、径 2.2×3.4 cmである。柄については、1同様に錆身に近い方がいくらか太い。

3は、復原すれば柄の握りが逆三角形くり抜き形と推定されるもの。柄は現存長42.7cm、径 2.6×2.7 cmである。握部と柄部の境には、肥厚がある。そして、握部は、主軸線から一方に寄ってつけられている。



第19図 木製品実測図(4)

鉢身 4は現存長19.0cm、幅7.0cmのもので、周縁幅0.7cmより内は凹んで7いる。

錐状木製品 5は現存長42.0cmで、柄部は多く欠失している。身長29.7cmで、丸味をおびた平面形をもつ刃先は、幅11.6cm、厚さ10.3cm、身元は刃先から18.0cmのところから徐々に狭くなり、柄部との境では29.7cmある。刃先から6.4cmのところから底辺3.4cm、高さ9.4cmの三角形状の窓をつくる。この窓は非常に粗くつくられている。柄部は幅5cm、厚さ1.5cmの扁平なかまぼこ断面を呈する。

6は鍔身が残存するもので、身長35.6cm、幅13.4cm、厚さ1.2cmある。身には、5よりも小さい三角形状の窓がついている。

柄付石斧 7は伐採用の縦斧が柄に着いたまま発見された珍らしい例である。石斧については、既述した(P.20参照)。柄は直柄であって現存長37.4cm(推定長80~90cmか)握部19.0cm、径3.0~3.4cmである。基端部は欠失している。石斧を繫綴する台部は長さ18.4cm、先端部13.0cm、石斧を挿入する孔部分は、外幅5.9cm、厚さ4.5cm。孔の径は上面で3.9×5.6cm、下面で4.1×5.5cmある。孔は主軸に対して左側よりも右側が厚くなっている。台

器下面には、主軸と同方向の中央に長さ4.2cm、幅2~2.3cmの溝を彫っている。台部の両側面とも丸みをもつ加工となっている。柄の主軸と石斧を着装した角度は79度である。柄に石斧を挿入した場合、上側手前には隙間が生じている。材質はカシ類でない。

藤柄 8は横斧の柄で、立木の枝分れ部分を使用している。柄の長さ35.5cm、径1.7cmである。斧台の現存長さ9.2cm、復原長11.0cm、幅2.2cm、厚さ2.5cmで断面は五角形状を呈する。下方には發がつくものである。若柄角度は73度。基端部は五面の面取り処理をする。小型扁平片刃石斧の柄と考えられる。

9は柄の長さ38.8cm、径2.2×2.7cmで、斧台は復原長13.7cm、幅4.8cm、厚さ1.3cmある。斧台部は、木の幹部分を一部切り取って作っている。基端部は丁寧な面取りをする。握部で径2.7~2.2cm。10は、柄の長さ47.5cm、径2.5~3.1×1.7~2.2cmで、斧台部は、先端部が欠損するが、現存長12.5cm、復原長16.5cm、幅9.5×2.8cmである。柄部と台部の境に段がつく。3つのうちでは柄の長さも長く斧台も大きい。

木様状木製品 11は一本作りのもので、刃部の半分程が欠失する。身を含んだ柄の長さ24.0cm、厚さ2.2cmある。柄尻は勾手状になり、その幅4.6cmある。身の幅6.2cm、推定長21cm、厚さ1.5cm程度である。刃部幅1.0~1.8cmで、刃先角は60度、身の棟は丸味を帯びている。

半截刺込み状木製品 12は長さ21.6cmの半切材の内側を削りぬいたもの。内法長さ20cm、幅は推定復原7.0cm、中央部の高さ2.0cm、内法深さ1.2cm、厚さ1.0cm、縁部厚さ0.4cmである。底面は樹皮を剥いだ面を、そのまま用いている。何らかの容器と考えられる。

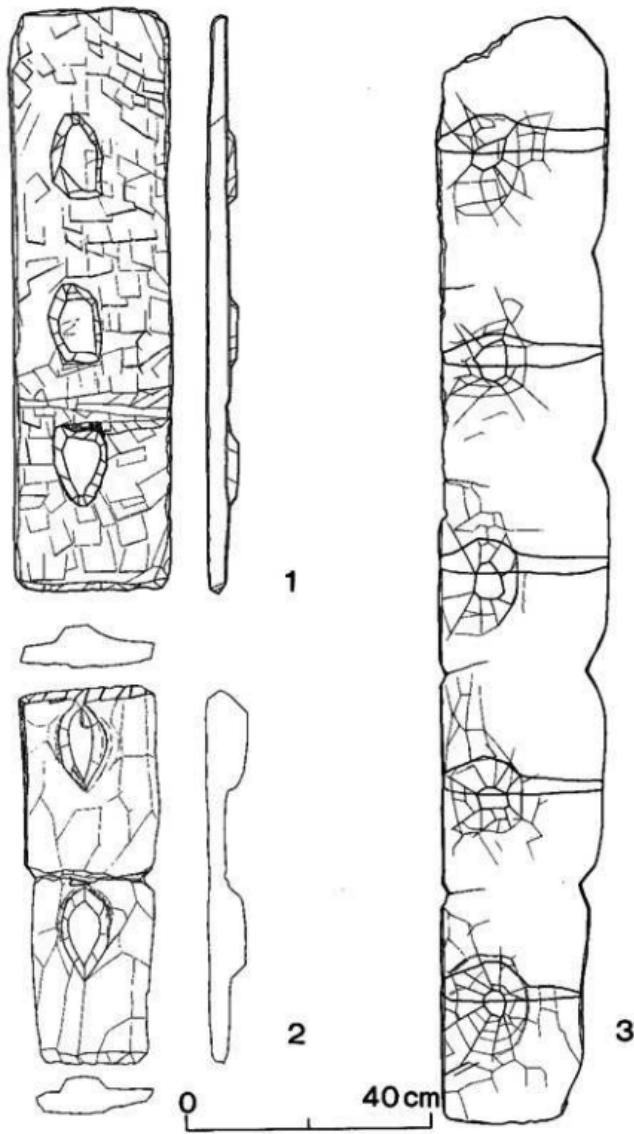
切込みのある板状品 13は長さ25.7cm、幅7.6cm、厚さ1.8cmの板の一方の中ほどを長さ12.1cm、幅2cmを切込んで欠いだものである。

高环、杭状木製品、木弓状木製品など(19図、PL. 14)

高坏 1脚部のみが残存する。脚端部径16.8cm、現存高さ6.7cm、脚筒部上端の外径7.9cmである。ハの字状に開く脚は、端部が外方に反る。脚筒部は幅1cm程度のノミ状工具により削って整形する。脚端部の加工は、滑らかである。ロクロによる整形かと考えられる。表面は焼け焦げている。

用途不明木製品 2(部材) 現存長さ5.7cm、厚さ0.7cmの断面がレンズ状となるもので先端は径2.6cm、幅1.3cmの円柱状のものがつく。円柱状の先端面には径1.3cmの円形があり、中心に1mmの穴があいている。

糸巻状木製品 3完形品、長さ13.5cm、径3.5×3cmの丸棒状のもので、両端はそれぞれ端から1.6cmの外周を、U字状に削って彫りこみをいれている。糸巻シロ作りに使用される糸巻錐に酷似する。



第20圖 木器未製品実測図(1)



第21図 木器未製品実測図 (2)

溝形状木器 4は部材、現存長さ38.1cm、幅11.7cm、高さ7.8cm、底の厚さ2.4cmある。外面には、樹皮面をそのまま残しており、内面は磨かれ滑らかである。

用途不明木製品 5部材 現存長38cm、幅3.8cm、厚さ1.9cmの角材で、^{柱穴}柄穴がある。

楕状木製品 6部材 現存長28.3cm、中央幅3.7cm、厚さ1.2cmで、楕状の形をし、一方は厚く、他方は尖っている。

杭状木製品 7完形品 長さ23.3cm、径3.5cmの芯持材で、先端は尖る。頭部は鈍く尖る。

8完形品 長さ33.8cm、径2.8×3.2cmの芯持材で、中ほどから先端は尖る。外周は、いくらか削って加工している。

柄状木製品 9完形品 長さ68.8cm、径3.0～3.7cm。外周表面は削っている。圓の上側はグリップエンド部と思われ、小枝部分をいねいに面取り仕上げしている。

10部材 現存長さ44.8cm。径2.0～2.7cmの断面が長円形をする。端部の残る側の先端はいくらか曲り、断面が倒卵形をする。芯持材でない。

木弓状木製品 11部材 現存長50cm、径2.0×1.8cmで、いくらか弧状に曲った部材である。端部の残る側は、先端に近いほうを削って細くしている。そして、先端部2cmほどには、すれた痕がある。

棒状木製品 12部材、現存長46.6cm、径2.0cmで、一方の先端は丸く尖るが、他方は折損する。そして、先端から5.3cmのところに切り込みを入れ、それより内側の外周を削って径1.7cmとしている。先端は、削って尖らせている。

荷負棒状木製品 13完形品 長さ46cm、直徑2.1cmのもので、ほぼ太さの同じ芯持材を用いている。両端は丸く加工され、その端から2cmのところに切りこみを入れている。切りこみは、一方の側はV字状になっており、他方の側は直線状に削り、先端が少しふくらむ。両端とも形状が相似する。

鍼の未製品 (20図、PL. 15)

1、2は広鍼の加工途中の未製品である。1は一枚のミカン割り材で、3個の広鍼を木取りし、加工しかけたものである。長さ96.5cm、幅25.8cmの板材に、2個は同方向に、1個は反対方向に木取りしている。厚さ3.8cm、舟形隆起部を加えた厚さは、5.0cm。一個側の肩部には切りこみがある。舟形隆起部分が、一方の側縁に片寄って作られている。表面には、刃幅1.4～4.6cmの削り痕が明瞭に残る。また、岡右健の1個には切り離しのための溝が切ってある。裏面は、明瞭な加工痕は見られず、割截面をそのまま残している。2は2個を木取りした加工途中のものである。長さ61.5cm、幅22cm、厚さは3.2cm、舟形隆起を加えた厚さ6.8cmである。鍼と鍼の境を切り離すために切れ込みをいれて加工をすすめかけている。

3は、丸鍼の木取り加工途中のもので、1枚の板材から5個の丸鍼を横木取りしている。材の大

きさに対応して、大きいものから小さいものへと順に木取りしている。現存する板材の長さは、182cm、幅28~20cmである。隆起部分の厚さは、最大で6.4cm。刃先部は、3.2~1.0cmである。板材はミカン割り材で、鋸と鋸の塊は、丸みのあるV字状の切りこみをいれている。上部にも、その切りこみに対応し、V字状の抉りと鋸で切り込んだような幅1mmの溝が観察できる。頭が木芯側、刃部が木縁側となっている。原木は直径60cm以上の大さきのものを用いている。

鋸の未製品 (21図、PL. 16)

1は、広鋸の加工途中のものかと考えられる。長さ46.0cm、幅24.6cm、厚さ8.6cm。ミカン割り材で、右端側は、表裏両面からの切り込みのあと、残り0.5cmの厚さ部分は、折って切断している。左側は、左下から斜め方向に切り落し、左上部分は折ったような痕跡が認められる。2は、広鋸の未製品である。長さ31.0cm、幅26cm、厚さ1.9cmである。肩部の両端は丸みをつけている。柄孔は未穿孔で、厚さは2.9cmである。縁部から柄孔部分に向けて、幅3~6cmの削り痕が残る。

3は、ゲタ付の広鋸未製品である。柄孔は未穿孔である。長さ23.7cm、幅21.5cm、厚さ1.0cmである。舟形隆起の高さは、2.1cm、ゲタの高さは、1.3cmである。舟形隆起のつく面にはその刃部側の中央縱方向に稜線がつく。全体に摩耗が著しい。

4は、丸鋸で、完成に近いものである。長さ24.5cm、幅33.0cm、厚さ1.1cmである。頭部の一方の角を切り丸みをつけるとともに、刃部の両側の角を切り落している。柄孔は、直径2.7cmである。着柄角度は50度である。縁部の成形が終わると完成品となすものである。

5は丸鋸である。長さ27.5cm、幅39.0cm、厚さ0.8cm、隆起部厚さ5.0cmである。横には木取り時の不要部分が付着したままである。柄孔は、頭部近くに計画されているが、まだ孔は穿たれていない。4に比べ、縁部の大まかな成形を終えており、製作過程を復元する上で、どちらも興味深い資料である。

5は一本鎌で、残存長は長さ68.8cm、幅17cm、柄の長さ30cm、その径4.4cmある。身の厚さは、2.4cmであるが、一方の面は、甲丸気味である。

5. 漆器・その他の遺物

漆 器

5点の漆器の出土があった。(PL. 16) いずれも縦櫛と推定されるものであり、昭和55年度調査出土分を合わせ本遺跡から8点が出土している。いずれも齒の部分は欠落している。身の部分の形態から二種に分類される。

A類1~3は、身の部分が方形を呈するものである。径約3mmほどの竹ヒゴを並べ、それを糸で編み、さらに漆で塗り固めるといった製作方法である。表面には朱漆が塗布されている。

B類4、5は、円弧状をなす身の形態を持つ縦構である。歯の部分は欠落するが、断面が長方形をする竹ヒゴが用いられている。4は、横糸4本を一単位とした糸編み、意匠的な配慮をほどこしているようにも見える。両者とも表面には朱漆を塗っている。時期については特定できない。

その他の遺物

他に自然遺物の出土もあり、その主なものは植物種子類であった。ドングリ、トチの実、クルミなどであり、前年度と同じような様相である。クルミには明らかに食用に供されたと思われる痕跡を示すものもあった。他には桜の皮もあった。自然遺物は花粉分析、木製品の樹種鑑定と合わせ、本遺跡周辺の当時の植生を推定する上で興味深い資料となるものである。

VII まとめ

昭和55年度と56年度の二年次にわたる西川津遺跡（宮尾地区）の発掘調査は一応の終了を見た。以下に、この調査によって得られた成果、今後の課題等にふれ、まとめとしたい。

出土した土器のなかで注目されるのは第9図の11で、前期後半期のものと推定されるが、色調、文様等山陰出土の土器とは趣きを異にし、播磨系のものと思われる。1点の資料であるが兵庫県播磨地方と何らかの関係をうかがわせるものである。

今回の発掘調査で得られた大きな成果は何といっても木製農耕具の多量な出土があげられる。特に鍬類では、広鍬、狭鍬、丸鍬の製品、そして、広鍬、丸鍬では各段階の未製品の出土があり、当地方での鍬類の製作過程をある程度判明することができた。県下の低湿地遺跡の発掘調査は、松江市のタテショウ遺跡、西川津遺跡、布田遺跡等とまだ少なく、今後この類の出土例が増加し、ますます研究が進展していくことを期待したい。

西川津遺跡、タテショウ遺跡から出土した広鍬は、形態的に、頭部に半円形の抉り、肩の部分に2～3ヶの刻目を持つものが見られる。時期の特定が出来得ず残念なところであるが、他地方に類例を見ないものであり、当地方の地域色と考えてよいと思われる。それは、単なるデザイン上の特色なのか、鍬の機能を左右するものなのかは、今後の研究に俟ちたいところである。

次に、丸鍬については、未製品、製品を合わせかなりの数がまとめて出土した。この鍬の特徴を列記すると以下のようになる。

- ① 他の鍬、鋤類と違い横木取りがしてある。
- ② 外面は丁寧、内面は粗いという表面の調整加工に大きな筋がつけてある。
- ③ 刀部が欠落しているものに補修孔を持つものがあり、削れてもヒモの緊縛により再使用が可能である。

④ 柄孔が鍔軸に対して常に鈍角に穿たれている。ただし、着柄隆起が内向きの場合は鋭角の可能性もある。

⑤ 内面の柄孔部分は溝状を呈しており、この鍔と柄だけではしっかりととした固定がむずかしい。このような特徴が見られることから、この丸鍔の機能を考えてみると、形態的な面から丸鍔と呼んでいるが、打耕具としては考えにくく、他の何かと組み合わせて使用するような物と考えたい。今後の出土例、あるいは民俗例など今後の研究に待ちたいところである。

また、着柄された状態で出土した大型蛤刃石斧も、大阪府鬼虎川遺跡に次いで全国二例目の出土例として注目を集めた。

さて、本遺跡の性格、範囲の問題であるが、すでに述べたように、出土した各種の遺物は造構等に伴って出土したものではなく、河川の氾濫によって集積された状況を示すものであった。発掘調査地点から近いところに当時のムラが存在していると思われる。西川津遺跡は、本宮尾坪内地区から上流の貝崎地区までの範囲を呼んでいるが、調査区の上流部では遺物の出土が認められないので、本遺跡の範囲は宮尾坪内地区に限定されることが判明した。

二年度にわたる本遺跡の発掘調査は、集中豪雨による冠水、軟弱な地盤での人手による機械的運搬など悪条件での調査であったが、調査に携った多くの方々の協力を得ながら完了した。西川津遺跡の発掘調査によてもたらされた資料が、わたしたち自身の歴史やくらしを見つめ直すきっかけとなれば幸いに思う。

参考文献

- 滋賀県教育委員会『大中ノ湖南遺跡調査概要』1967
- 宍道正年『島根県の縄文土器集成 I』1974
- 根木修「木製農耕具の意義—弥生時代を中心として—」(『考古学研究』第22巻第4号) 1976
- 東森市良他「弥生式土器集成」(『八雲立つ風土記の丘研究紀要 I』) 1977
- 島根県教育委員会『タテショウ遺跡発掘調査報告書』1979
- 三重県教育委員会『納所遺跡発掘調査報告書』1980
- 島根県教育委員会『西川津遺跡発掘調査報告書』1980
- 島根県教育委員会『西川津遺跡詳細分布調査報告書』1981
- 国道308号線関係遺跡調査会『鬼虎川遺跡』1981

VII 松江市・西川津遺跡の花粉分析

島根大学理学部 大 西 郁 夫

山陰地方、特に中海・宍道湖周辺地域では、今から約5,500年前に、カシ類、シイ類を中心とする暖温帯常緑広葉樹林（照葉樹林）が完成し、それがこの地域の原生林（原植生）である。その後、約3,000年前から、小規模な気候変化と、特に農耕がはじまって以来の人工的な森林破壊によって、原植生は大きく変わり、現在のアカマツ・コナラを中心とする二次林となってきた。この植生変化の過程を解明することは、気候変化と人為のそれぞれの植生変化への影響を知る上で重要である。しかし、この時代の堆積物（中海層最上部）は、どこでも、時間的な連続性に欠け、小さな時間的間隔を数多く含んでいて、一つの断面だけでは、連続的な植生変化を追うことができない。そのため、いくつかの断面を総合して考える必要がある。筆者はすでに「タテチョウ遺跡」（大西、1979）などで、この時代の堆積物の花粉分析を行い、植生変化についても報告してきた。今回、西川津遺跡の花粉分析をおこない、いくつかの新知見が得られたので、ここに報告する。



第22図 西川津遺跡とタテチョウ遺跡

1. 分析試料

西川津遺跡の発掘ピットの壁面から、ほぼ5~10cmごとに48個の試料を採取し、そのうち31個について分析を行った。分析した試料について、岩質と試料番号を第1表に示した。

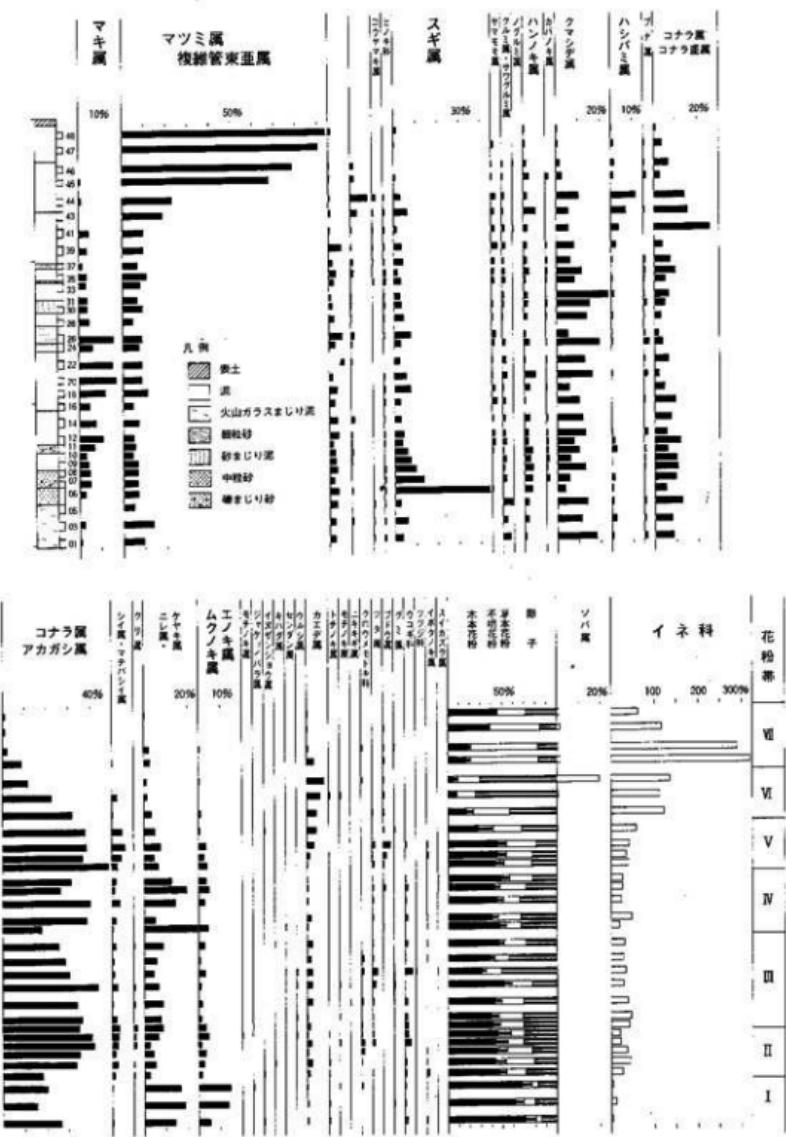
第1表 岩質と試料

岩質	層厚(cm)	試料	岩質	層厚(cm)	試料
表土	5		カッ色泥	5	24
淡青灰色泥	25	48, 47	暗カッ色泥	40	22, 20, 18, 16
カッ色泥	35	46, 45, 44	灰色細粒砂	0.5	
カッ色泥	35	43, 41, 39	暗カッ色泥	24	14, 12
カッ色泥炭質細粒砂	4	37	カッ色中粒砂、礫まじり	5	11
チョコレート色泥	8	35	暗青灰色泥	12	10, 09
カッ色砂まじり泥	2		灰色~カッ色中粒砂、下部	20	08, 07
チョコレート色泥	12	33	礫まじり		
カッ色砂まじり泥	10	31, 30	灰色中粒砂	12	06
カッ色泥	10	28	青灰色泥、火山ガラスを多	30+	05, 04, 03
カッ色泥、砂のレンズ多い	13	26	量に含む		
灰色中粒砂	1				

2. 分析方法

試料が泥のときには約50g、砂のときには約100gを500mlコはカルビーカーに入れ、次の処理を行った。

- 1) 10% KOHを入れ、24時間以上放置
- 2) 水を加え、良くかきませ、24時間放置後、上ずみをする。上ずみが透明になるまでくりかえす。
- 3) 250μのふるいを通して、粗粒部をのぞく
- 4) 超音波洗浄器にかける。
- 5) 水を加え、良くかきませ、2時間放置後、上ずみをする。上ずみが透明になるまでくりかえす。
- 6) 10ml 遠沈管にとり遠沈
- 7) 過飽和の2rCl₂水溶液を加え、遠沈、浮いた花粉を集める。
- 8) アセトリシス処理
- 9) グリセリンゼリーで、封入



3. 検鏡と結果

検鏡は400倍でおこない、木本花粉の合計(ΣAP)がほぼ250になるようにした木本のタクサ40と草本タクサ32が同定された。ただし、マオウ属は、木本種ではあるが、日本に現生しないので、 ΣAP に含めなかった。結果は、 ΣAP を母数とした百分比で表わし、木本タクサ39とソバ属、イネ科については第22図に、その他は第2表に示した。また、木本花粉、不明花粉、草本花粉および胞子のそれぞれの百分比も第22図に示した。

タクサの名前は、北村ほか(1961~1979)に従い、各タクサの配列は伊藤(1976)に従った。

4. 花粉分帯

第2図をみると、層準ごとにそれぞれ類似した花粉組成を示している。これを花粉帯と呼ぶことにすると、7つの花粉帯が区別される。下位から第I~第VII花粉帯とする。

第I花粉帯：木本花粉が60%をこえる。ムクノキ属一エノキ属とニレ属一ケヤキ属が多い。

第II花粉帯：スギ属とイネ科の急増が特徴的である。

第III花粉帯：マキ属とイネ科が多い。

第IV花粉帯：クマシデ属とニレ属一ケヤキ属が多い。イネ科も多く數10%ある。

第V花粉帯：アカガシ亜属とシイ属一マテバシイ属が多い。

第VI花粉帯：マツ属がふえはじめる。イネ科は100%をこえる。コナラ亜属やカエデ属、ハシバミ属、ツガ属も多い。木本花粉が特に少なく、胞子の数がふえる。

第VII花粉帯：マツ属が特に多く70%をこえる。イネ科も多い。

5. 考 察

穴道湖底ボーリングSB-1(水野ほか、1922)の花粉分析結果(大西1977)によると、中海層の中で、ムクノキ属一エノキ属が特に多い層準は、下部(NI花粉帯)と中部と上部の境界付近の2層準でみられる。そのうち、下部のものはアカガシ亜属がほとんど見られず、コナラ亜属が多いという特徴をもち、第I花粉帯とは異っている。中部と上部の境界付近、とくに上部の下半の花粉組成は、アカガシ亜属、ニレ属一ケヤキ属、クマシデ属が多く、第I花粉帯の花粉組成と類似する。また、一般的に産出のまれなジャケツイバラ属もみられることも一致する。この層準には火山ガラスが多く含まれるが、これも、SB-1のNI:火山灰(水野ほか、1972)と対応するものと考えられる。このように考えると、第I花粉帯の年代は約5,000年前と推定される。

第I花粉帯は、スギ属とアカガシ亜属が多く、タテチョウ遺跡のE層(スギ・シイ時代、大西、1979)と類似する。この層準は両遺跡とともに遺物の包含層であり、古墳時代の後半に当たるものと考えられる。

タテチョウ遺跡では、スギ・シイ時代に次いで、シイ・イネ科時代となる。この時代の花粉組成

は、アカガシ亞属、コナラ亞属、クマシデ属、シイ属—マテバシイ属、カエデ属などが多い（大西、1979）。このような花粉組成は西川津遺跡の第V花粉帯の特徴と一致する。すなわち、タテショウ遺跡では見られなかった時代の堆積物が西川津遺跡では認められたことになる。

第VII花粉帯はマツ属が70%をこえ、タテショウ遺跡でのマツ・イネ科時代に当るのは確実である。また、ここではマツ以外の木本種が極端に少く、マツ・イネ科時代でも後半期に対応するものと考えられる。

第VI花粉帯では、木本種がきわめて少く、イネ科が100%をこえるほど多い。この特徴はマツ・イネ科時代の中期内に対応するものと考えられる。

文 献

- 伊藤 洋、1976：新高等植物分類表。128p., 国館の北隆館。
- 北村四郎・村田 源・福勝、1961：原色日本植物図鑑（上）、草木編〔I〕、合弁花類。297p., 保育社。
- ・——、同上（中）、草木編〔II〕、離弁花類、390p、同上。
- ・——・小山鉄夫、1964：同上（下）、同上〔III〕、单子葉編。464p、同上。
- ・——、1971：同上、木本編〔I〕。400p、同上。
- ・——、1979：同上、同上〔II〕。545p、同上。
- 水野萬行・大島和雄・中尾征二・野口寧正・正岡栄治、1972：中海・宍道湖の形成過程とその問題点。地質学論集、(7)、113-124。
- 大西都夫、1977：出雲海岸平野下第四紀堆積物の花粉分析。地質学雑誌、83(10)、603-616。
- 、1979：花粉の分析、朝鈴川河川改修工事に伴うタテショウ遺跡発掘調査報告Ⅰ、188-193。

VIII 西川津遺跡出土木製品の樹種識別

島根大学農学部 古 野 稔

西川津遺跡から発掘された木製品は水中浸漬して保存されていた。これらの木製品の樹種識別を行うために、顕微鏡観察用の永久プレパラートを作製した。提供された出土材は約2000年というきわめて長年月にわたって地中に埋蔵され、湿潤な状態に保たれていたが、ほとんどの試料が腐朽、劣化が進み、木材組織の変質、軟化が著しく、顕微鏡観察のための良好な切片を得ることは非常に困難な場合が多くあった。そこで以下の方法で検鏡用切片を作製した。

まず試料の加工部分を避け、できる限り試料に損傷を与えないように各試料から5mm角程度のブロックを3個採取した。これらのブロックはそれぞれ横断面（木口）、半径断面（柾目）、接線断面（板目）の切片が得られるように、各断面を正確にトリミングした。湿潤状態のままのブロックにアロンアルファー接着剤を塗布、合脂させて硬化した後、台木に接着した。スライディング・ミクロトームによって厚さ25~35μm厚さの3断面の切片を作製した。接着剤は切片を取るごとに試料表面にその都度塗布した。切片の染色はサフラニンとライトグリーンの二重染色で行ない、アルコール（50%、70%、80%、90%、95%、99.5%、100%）で順次脱水し、キシレンで置換して最後にカナダバルカムで封入することによって永久プレパラートに仕上げた。試料の3断面の顕微鏡観察を行ない、解剖学的性質から総合的に判断して樹種名を鑑定した。

各試料の鑑定樹種名および写真は別記の通りである。

鑑定された樹種の識別拠点を下記のように述べる。

1 モミ *Abies firma* Sieb. et Zucc. (マツ科)

構成細胞は仮道管と放射柔細胞の2種類のみである。正常材には樹脂道は存在しないが、外傷で傷害樹脂道が生ずる場合があり、鑑定した3点の試料にはいずれも傷害樹脂道が認められた。樹脂細胞は存在しない。年輪界は明瞭で、早材から晩材への移行はやや急ないし急である。晩材幅は比較的広く、早材と晩材の壁厚さに差がある。放射組織は単列で、放射柔細胞のみからなり、放射仮道管は存在しない。放射組織の細胞高は一般に高く、30細胞高を越える場合が見られる。分野壁孔はスギ型で1分野に2~5(ときに6)個存在する。放射柔細胞の壁は厚く、单壁孔対が明瞭に認められ、じゅうすく末端壁をもっている。仮道管にらせん肥厚は認められない。

2 カシ類 *Quercus (Cyclobalanopsis)* sp. (ブナ科)

構成細胞は道管要素、周囲仮道管、木部繊維、軸方向柔細胞および放射柔細胞の5種類である。

放射孔材で、道管はすべて孤立管孔のみからなり、放射状に配列している。道管のせん孔は単せん孔である。道管内こうにチロースを含むものがある。軸方向柔細胞が多く、接線方向に走る帶状柔組織を形成している。柔細胞ストランドの一部が方形細胞または異形細胞となり、その中に結晶を含むものが認められる場合がある。放射組織は同性型で、ほとんど平伏細胞からなり、著しく幅の広い広放射組織と多数の單列放射組織がある。広放射組織は複合型で、道管の放射状配列とともにカシ類の特徴をなくしている。放射組織と道管の間の壁孔は柵状である。周囲仮道管は道管の周囲を取り囲み、多数の有縁壁孔をもっている。

3 シノキ (スダシイ) *Castanopsis cuspidata* Schottky var. *sieboldii* Nakai (ブナ科)

構成細胞は道管要素、周囲仮道管、木部繊維、軸方向柔細胞および放射柔細胞の5種類である。環孔性の放射孔材である。孔隔壁部の道管は孤立管孔であり、子葉外の道管は小型で、放射状あるいは火炎状に配列する。道管のせん孔は単せん孔である。軸方向柔細胞は線状ないし短接線状に規則的に配列して明瞭である。放射組織はすべて單列であり、同性型でほとんど平伏細胞からなっているが、辺縁に方形細胞が見られる場合がある。集合型の放射組織は認められない。放射組織と道管の間の壁孔は柵状である。周囲仮道管は道管の囲りをかこみ、多数の有縁壁孔が見られる。

4 ホオノキ *Magnolia obovata* Thunb. (モクレン科)

構成細胞は道管要素、木部繊維、軸方向柔細胞および放射柔細胞の4種類である。散孔材で、単独あるいは2～4個放射方向に複合した道管が年輪内に均等に分布している。道管のせん孔は単せん孔である。道管壁に階段壁孔が明らかに認められる。道管中にチロースが多く観察される。放射組織は1～2細胞幅であり、平伏細胞と辺縁の直立細胞ないし方形細胞からなる異性型である。放射組織と道管の間の壁孔は対列状ないし階段状である。木部繊維に薄い隔壁が多く、顯著に認められる(隔壁木繊維)。年輪の最外層の数列の木部繊維はやや厚壁で、放射壁も短かくなっていて、さらに最外層にはターミナル柔組織が存在していると思われるが、はっきり確認できなかった。

5 ツゲ *Buxus microphylla* Sieb. et Zucc. var. *japonica* Rehd. et Wils. (ツゲ科)

構成細胞は道管要素、木部繊維、軸方向柔細胞および放射柔細胞の4種類である。散孔材で、道管はきわめて小さく、ほとんど単独で均等に分布しているが、道管の径は木部繊維や軸方向柔細胞と大差ない。道管のせん孔は階段せん孔である。barの数は少ない。放射組織は1～3(ときに4)細胞幅で、異性型を示す。放射組織の辺縁にある直立細胞の単孔部が長く伸びている場合が見られる。軸方向柔細胞は多く認められ、散在している。

6 ミズキ *Cornus controversa* Hemsl. (ミズキ科)

構成細胞は道管要素、木部繊維、軸方向柔細胞および放射柔細胞の4種類である。

散孔材で、道管は単独あるいは数個複合したものがほぼ均等に分布している。道管のせん孔は階段せん孔であり、顯著に認められる。放射組織は1～4細胞幅で、3細胞幅のものが多い。大半が平伏細胞で、辺縁の1～数個が方形細胞ないし直立細胞の単列部をつくり、異性型を示す。放射組織と道管の間の壁孔は交互状で多数存在する。木部纖維に有縁壁孔が明瞭で、多く見られる。

樹種鑑定結果

試料番号	製品名(用途)	樹種
No.1	箆	カシ類
No.2	接舷	カシ類
No.3	箆(未成品)	カシ類
No.4	鍼	カシ類
No.5	円盤状木製品	モミ
No.6	箆	カシ類
No.7	棒状木製品	ホオノキ
No.8	不明品	シイノキ
No.9	不明品	ツゲ
No.10	不明品	モミ
No.11	不明品	ミズキ?
No.10	不明品	モミ

ここに掲げた資料は昭和55年度の調査で検出したものである。

図 版



遺跡遠望（東から）



発掘前の状況（昭和55年）



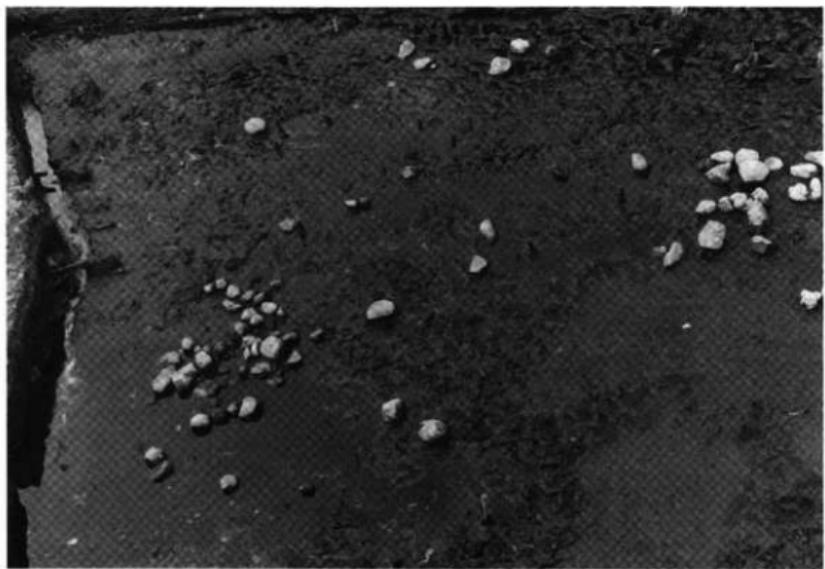
発掘調査風景



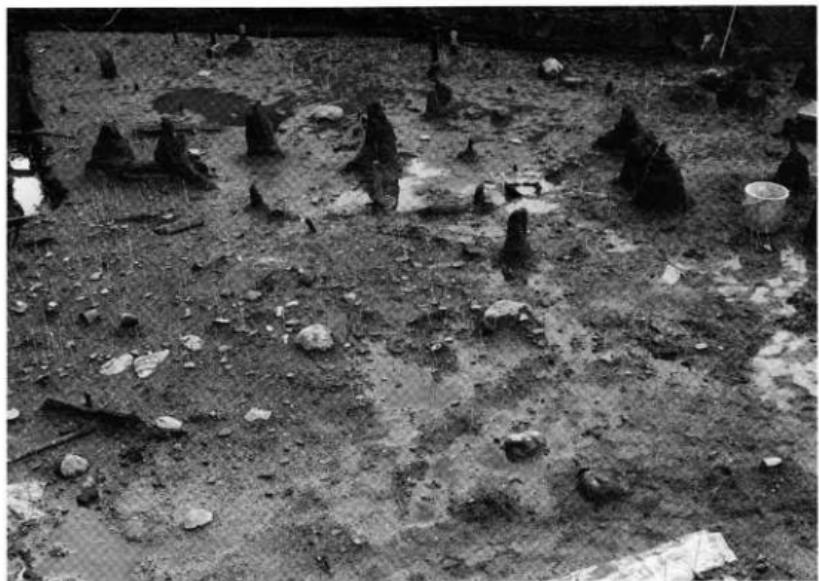
発掘調査風景（実測）



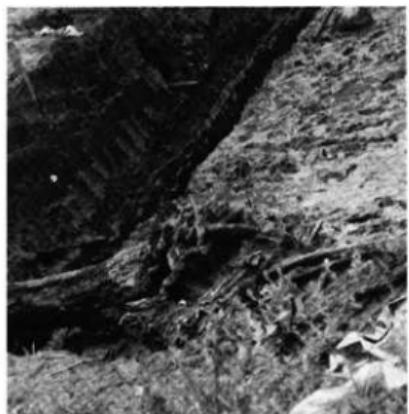
発掘調査区全景（手前から第Ⅰ～Ⅳグリッド）



第Ⅱグリッド遺構検出状況



第II グリッド杭及び遺物出土状況



第IV グリッド立木横転状況（第III グリッドの
ものと一体である）



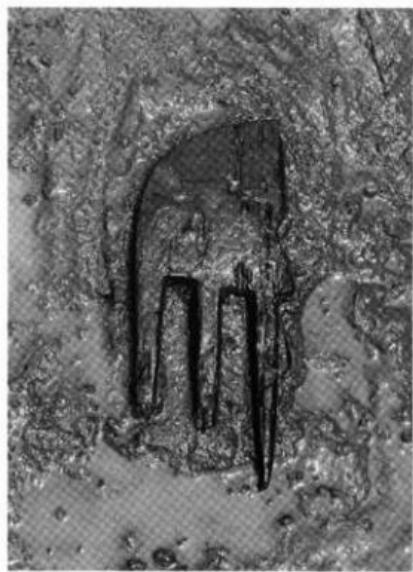
第III グリッド立木横転状況



鎌出土状況（第Ⅱグリッド）



鎌状木製品出土状況（第Ⅱグリッド）



又鎌出土状況（第Ⅱグリッド）



弥生土器出土状況（第Ⅱグリッド）



又鍬出土状況（第Ⅲグリッド）



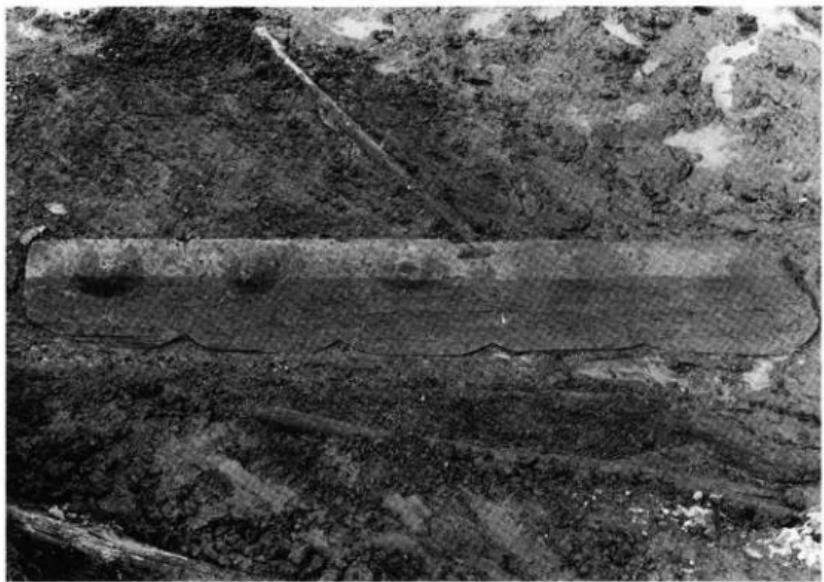
柄状木製品出土状況（第Ⅲグリッド）



狭鍬出土状況（第Ⅲグリッド）



丸鍬出土状況（第Ⅲグリッド）



丸鍛未製品出土状況（第Ⅲグリッド）



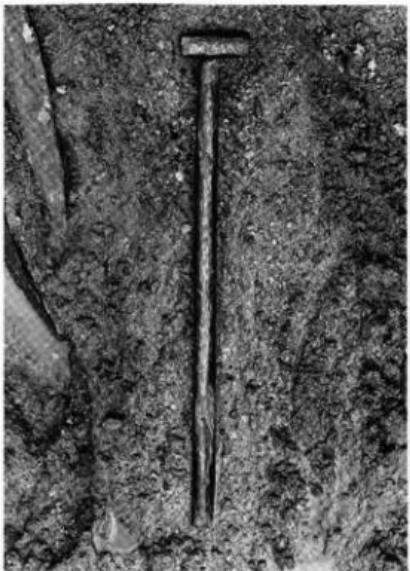
木製品出土状況（第Ⅲグリッド）



柄の装着された石斧出土状況(第IVグリッド)



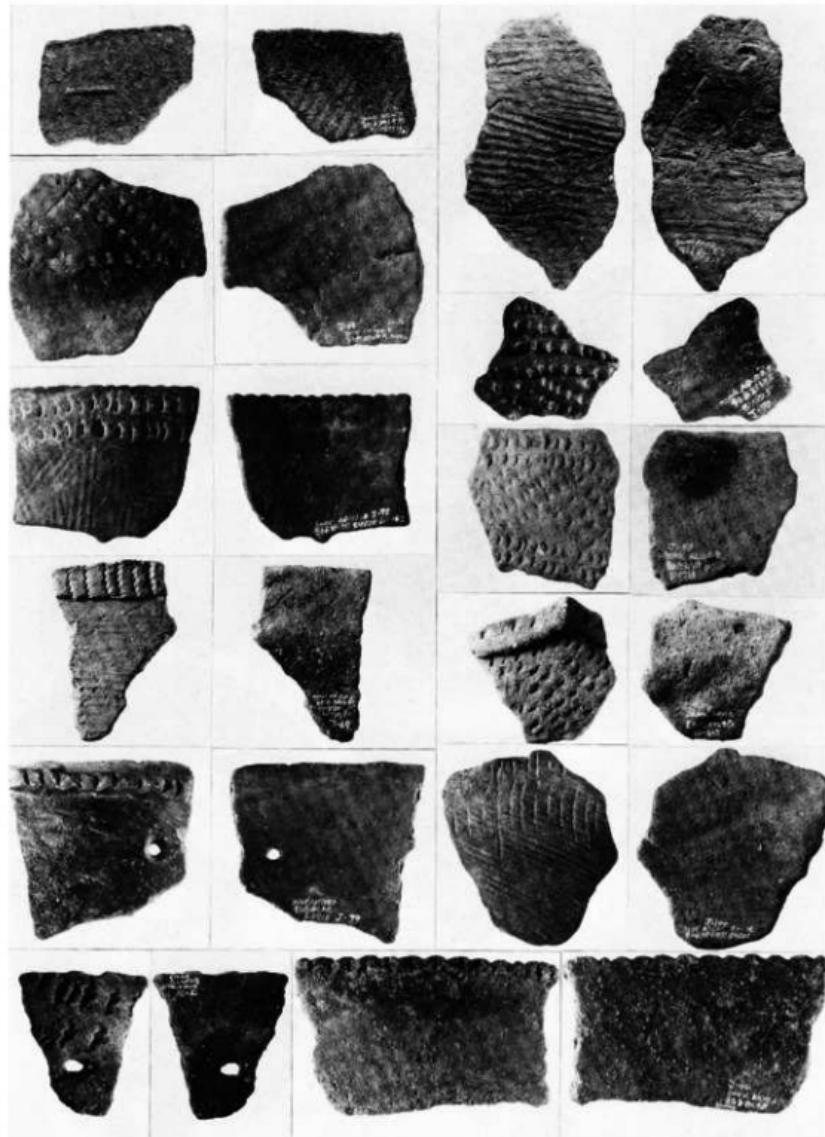
狭歛出土状況(第IVグリッド)



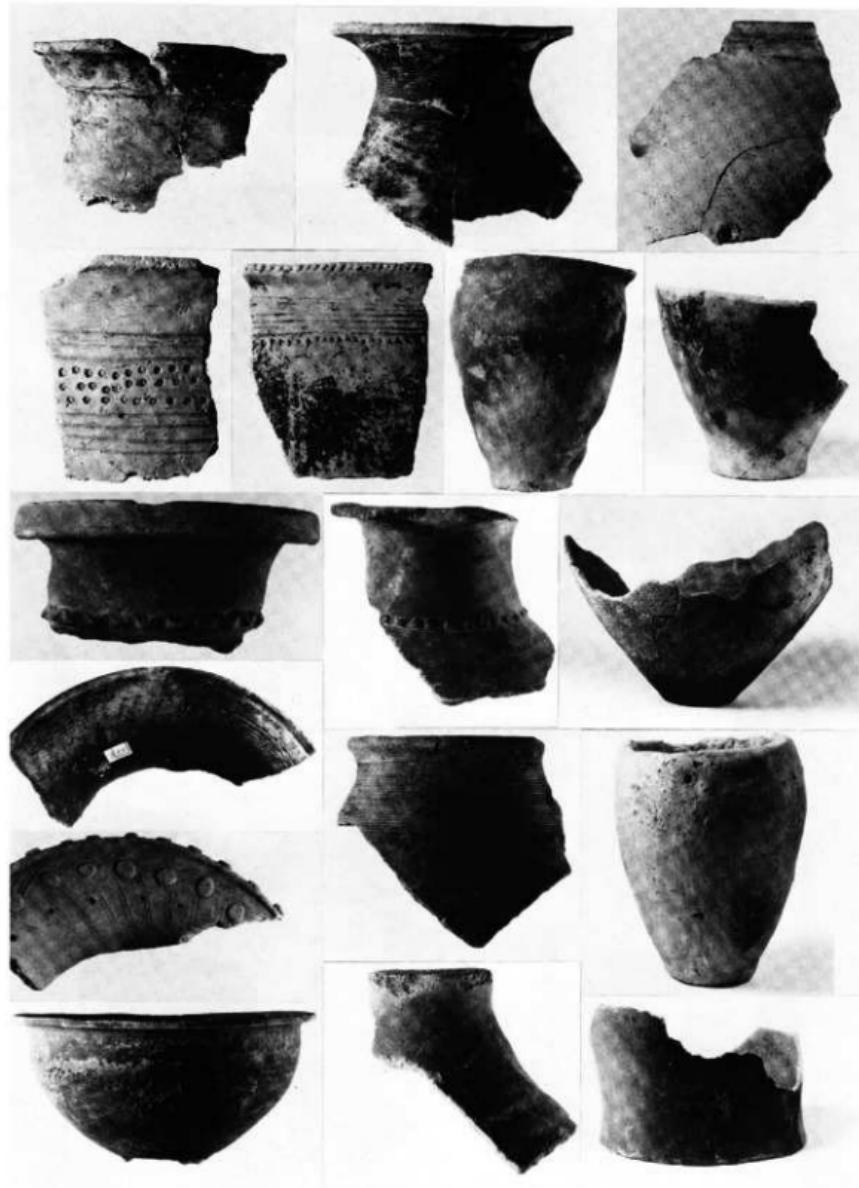
柄状木製品出土状況(第IVグリッド)



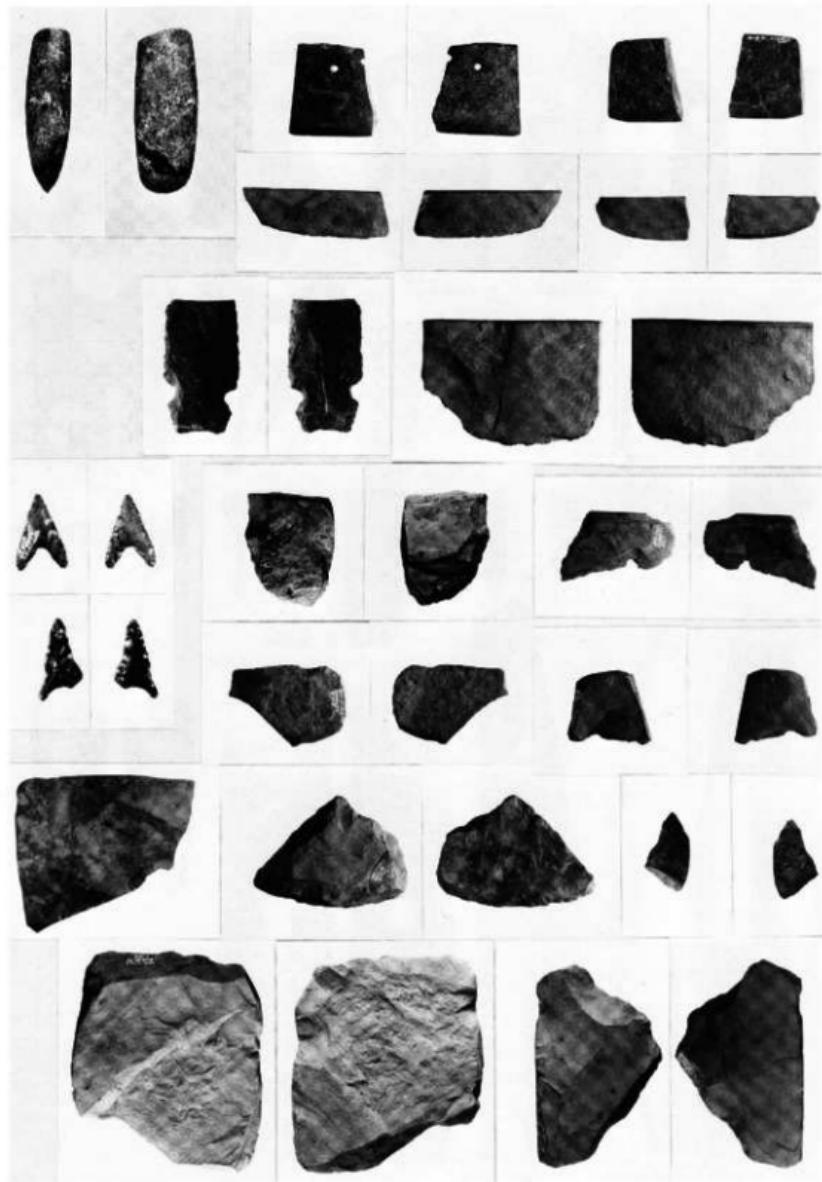
石斧装着用柄出土状況(第IVグリッド)



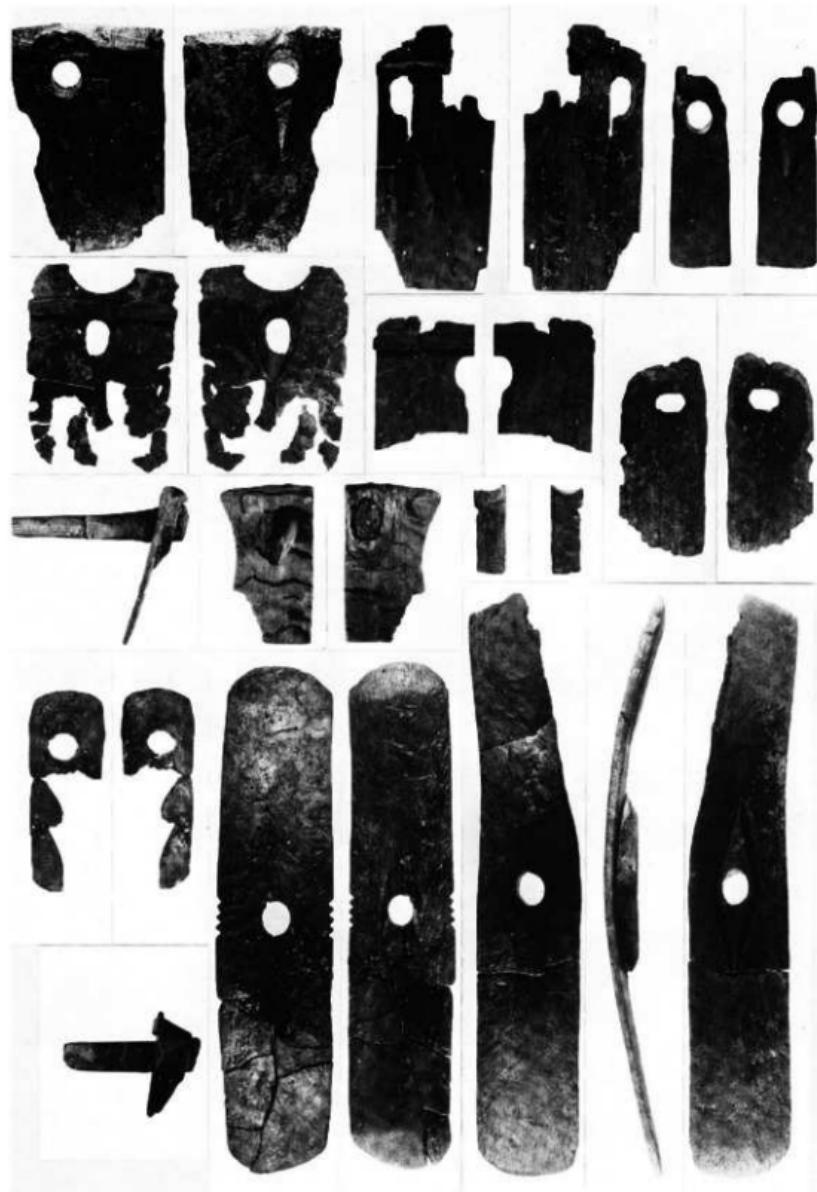
繩文土器



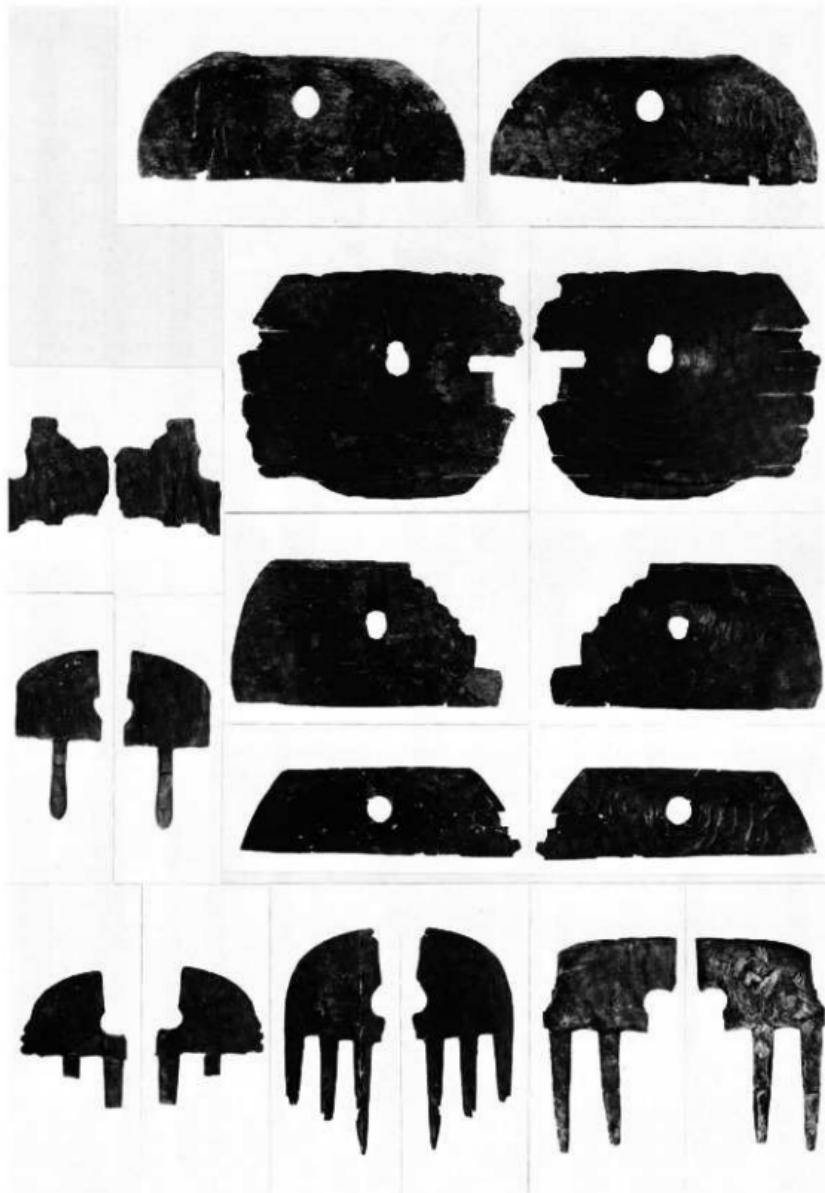
弥生土器



石器



木製品(鍼)



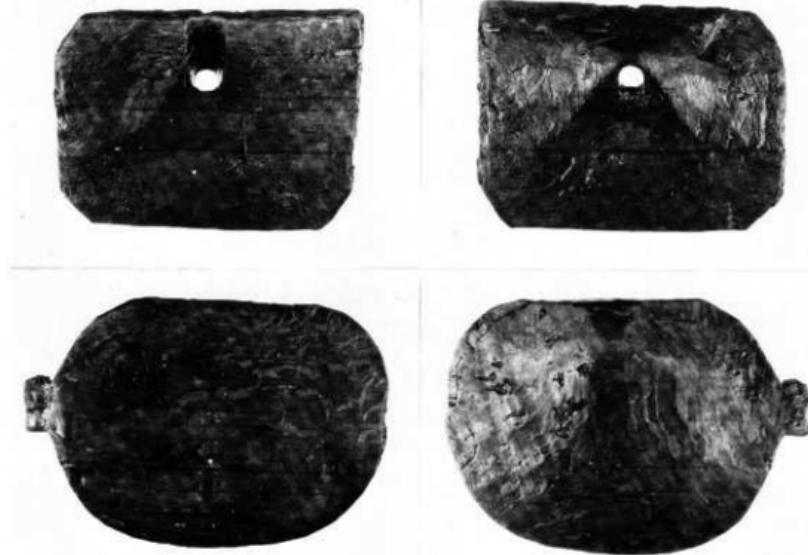
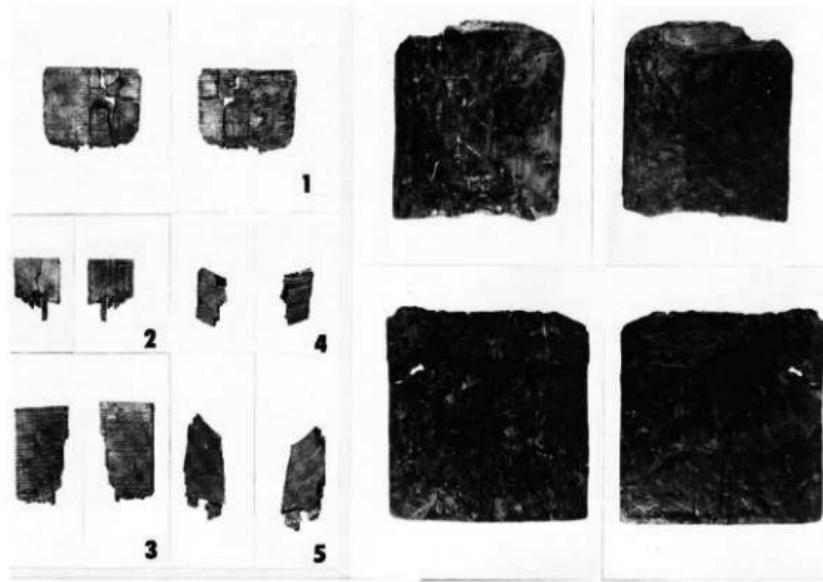
木製品(鐵)



木製品



木製未製品(鉗)



漆器(椎)・木器未製品

昭和57年3月15日印刷

昭和57年3月22日発行

朝酌川河川改修工事に伴う
西川津遺跡発掘調査報告書Ⅱ

編集・発行 島根県教育委員会

松江市殿町1番地

印刷・製本 株式会社報光社

平田市平田町993